

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-03

アマルフィ海岸のコンカ・ディ・マリーニ： 離散型集落からなるテリトリーオの空間構造

稲益, 祐太 / 陣内, 秀信 / Inamasu, Yuta / Jinnai,
Hidenobu / 法政大学陣内研究室 / Laboratorio di Jinnai,
Universita' di Hosei

(出版者 / Publisher)
法政大学エコ地域デザイン研究センター

(開始ページ / Start Page)
1

(終了ページ / End Page)
58

(発行年 / Year)
2019-07-01



アマルフィ海岸のコンカ・デイ・マリーニ

— 離散型集落からなるテリトリーオの空間構造 —

Costa di Amalfi- Conca dei Marini

-Insedimenti diffusi nell'organizzazione spaziale del territorio-

陣内秀信・稲益祐太＋法政大学陣内研究室

Hidenob Jinnai・Yuta Inamasu + Laboratorio di Jinnai, Università di Hosei

アマルフィ海岸のコンカ・ディ・マリーニ

— 離散型集落からなるテリトリーオの空間構造 —

Costa di Amalfi- Conca dei Marini

-Insedimenti diffusi nell'organizzazione spaziale del territorio-

陣内秀信・稲益祐太＋法政大学陣内研究室

Hidenob Jinnai・Yuta Inamasu + Laboratorio di Jinnai, Università di Hosei

目次

はじめに	・・・ 4
概要	・・・ 6
マリーナ地区 Rione Marina	・・・ 7
サンタ・マリア・ディ・グラード地区 Rione S.M.di Grado	・・・ 12
オルモ地区 Rione Olmo	・・・ 21
ペンネ地区 Rione Penne	・・・ 27
NOTIZE STORICO-TOPOGRAFICHE	・・・ 34
Paesaggio agrario e approvvigionamento idrico a Conca dei Marini	・・・ 38
付録	・・・ 47
参考文献・図版出典	・・・ 56
あとがき	・・・ 57

はじめに

数あるイタリアの都市のなかでも、中世の海洋都市として繁栄し、イスラーム世界の高度な文化を吸収してエキゾチックな華やかさをもつアマルフィの人気が高まっている。

私は法政大学の研究室の仕事として、一九九八年から 毎年のように学生達とこの町を調査し、海に開いた谷あいの斜面に形成された独特の迷宮空間の在り方を解明してきた。さらにこの数年は、アマルフィの町の外側にも目を向け、この海洋共和国を構成していたまわりの小さな町、村の調査を続けている。海沿いにはアトラーニ、ミノーリ、マイオーリ、ポジターノ、やや内陸の高台にはラヴェッロ、スカーラ、トラモンティなど、綺羅星のごとく素敵な町が点在し、役割を分担しながら、またお互い競い合いながら、強力な海洋国家のネットワークを 形づくっていたのだ。十二、三世紀のアラブ・イスラームの高度な文化から影響を受けた中世のアーチ、ヴォールトがアマルフィのみか、この海岸全体の広い範囲に今も残っており、東方との交流が深く入り込んでいたことを裏付ける。

今年、我々が調査対象に選んだのは、アマルフィの西隣に位置するコンカ・デイ・マリーニという小さな町である。ここでは石灰岩の崖、山が背後に控え、急な斜面が海に向かって降りる。リアス式海岸のように入り組んだ変化に富む地形が続き、山と海を結ぶ大地の全体が、見事な文化的景観を生んでいる。隣のアマルフィが世界的に知られるリゾート地になり、大衆的な観光地と化したのに対し、このコンカは美しい風景と同時に落ち着きがあり、ゆっくりヴァカンスを楽しむ人々に隠れた人気がある。

無名の町だがその歴史は古く、実に面白い。地形の特徴に応じ、四つの地区(コントラーダ)からなる。それぞれに教区教会があり、いずれも中世に起源をもちながら、財をなした十七、八世紀に華麗なバロック様式につくり変えられている。これらの教会の立地がいかにもアマルフィ海岸らしく、どれも海に張り出す高台の突端に建設され、風景の象徴となる。同時に、その前にとられたほどよい大きさの広場は、住民が集まる交流の場となっている。海へのパノラマが開くこうした快適な場所にコミュニティの共有空間があるのだから羨ましい。

アマルフィ海岸の他の地域と同様、コンカの人達も片足を海に、もう一方の足を陸に置くと言われる。海と陸の両方の恵みを活かし、豊かな地域を形成したのだ。古い起源をもつ村の一つが、狭い入り江に発達したマリーナの漁村集落で、浜を望むそのマドンナ・デル・ネーヴェ教会は十三世紀に遡るという。現在は、小さな入り江に海水浴場があり、背後にレストランが数軒並ぶ。漁師の数は激減したが、観光の発達で地産地消の魅力が見直され、若者の間に漁業に従事する人達が着実にいて、アマルフィ海岸が誇る海産物をベースにした美味しい料理を支えている。

一九六二年にジャクリーン・ケネディがこのマリーナにヴァカンスで滞在したことで、この漁村が一躍、有名になったという。その直前の一九五〇年代末まで、海に網を張るトンナーラというマグロ業がこの入り江で行われ、浜の内側にその産業を支えた建物が並ぶ。それらが今、人気のレストランに転じている。崖の上の道から浜に降りる階段状の坂道には、へばりつくように漁師の家々が並ぶ。そのヴァナキュラーな風景が何とも魅力的だ。

しかし、コンカの真骨頂は、急な斜面の土地に、段々畑状に造成された耕作地とその中に点在する立派な農家の建築にあると言えよう。最も古いペネ地区には、中世に起源をもつ二つの教会が、それぞれ海を臨む崖の上にそびえる。その背後の斜面に、有力家の邸宅が分布する。十七、八世紀の堂々たるヴォールト天井をもち、バロック的な装飾を見せるが、内部を調査すると、奥の部分には、中世の古いヴォールトが隠れていることが多い。中世起源の集落がコンカに存在していたことを裏付ける。十三世紀後半に、フランスのアンジュー家の支配下に入り、それまでアマルフィに従属していたコンカは、ユニヴェルシタスと呼ばれる一種の自治体のような存在になったのだ。こうした歴史的経験があってこそ、コンカの住民の自負、愛着というものが育まれている。この段階でコンカは、単なる漁師町、農村ではなく、船を駆使する商業、交易の活動を担う経済力をもつ町に変身・発展した。

斜面状の丘陵地で農場を経営する有力家は、同時に船持ちであり、海上輸送に活躍した。農業生産物に加え、山の上から切り出される木材の輸送が重要な産業となった。海洋交易に活躍するコンカの人々は十九世紀にも多かった。危険を冒して海に繰り出す船乗りの間には、信仰心が育まれた。サン・パンクラーツィオ教会には、嵐で難破しかかり命が助かった人々が、聖母マリア、聖人に感謝の念をもって寄贈した絵画が沢山保管されている。ニューヨークの方向を目指し、大西洋で難波した船が多いのが目を引く。いかにも海の町、コンカの特徴がここに現れている。

アマルフィ共和国は、ピサに攻撃され、十二世紀中頃にはその海洋都市としての地位を失ったように思われてきたが、現実にはアマルフィ海岸の全体に、近世の時代を通じて海との繋がりをもち、交易に活躍する人々が多くいたことは、注目される。ある家族の部屋に、ヴェネツィアのサン・マルコ広場の沖合に大きな蒸気船が停泊している写真が飾ってあったので、尋ねると、父親がこの船のコックとして働いていたといういい話が聞けた。

農業の形態、それが生み出す景観も実に興味深い。中世の古い時期から、棚田と似た段々状の造成手法が発達し、そこにレモン、ブドウ、オリーブに加えトマト等の野菜を耕作する農業が展開してきた。どの家も、農地、菜園、果樹園に囲まれ、その向こうの下方に、地中海らしい開放的な海へのパノラマが広がる。最近では、このような田園風景そのものに大きな価値が与えられてきた。

一九六〇年代からすでにこうした斜面に展開する農業は、市場での競争力もなく危機を迎えたが、近年、アマルフィ海岸のヴァカンス地としての価値が高まるに従い、ここでも地産地消のよさが評価され、農業の再生に力となっているという。

コンカにおける伝統的な建築の作り方は、理にかなっている。斜面をうまく利用し、上の道に正式の入口を設け、そのレベルに主階をとり、居間、寝室群、私的礼拝堂などを置く一方、その下のレベルには、前面に連続アーチのポルティコを設けて庭に開き、農業と結びつく動物小屋、ワイン倉を並べる。同時に、命を支える雨水を集める貯水層が不可欠だった。

一般の庶民の家は、この地域独特のヴォールト天井をそのまま屋上に見せているのに対し、有力家では、その上に木材を用いて屋根を架け、堂々たるパラッツォの風貌を獲得している。こうした一階にポルティコをもつ格好いい作り方は、十七、八世紀に大いに広がったようである。華やかな時代の先端の様式を海に開く表側に見せる一方、背後の台所などの生活を支える空間に、古い中世の建築要素が残る傾向がある。三階をもち、そこを夏の家として貸すケースも増えている。ゆったり長期滞在する人々にとって、都会的な賑わいに溢れたアマルフィの町より、田園風景の向こうに海が広がるコンカの農家、邸宅は理想的な環境を提供する。

コンカの町を調査し、この町の人々のホスピタリティに感激した。人々の心にゆとりがある。地元の風土、文化をこよなく愛する。急な階段を毎日、上り下りする大変さはあるものの、素晴らしい生活の場がここにある。

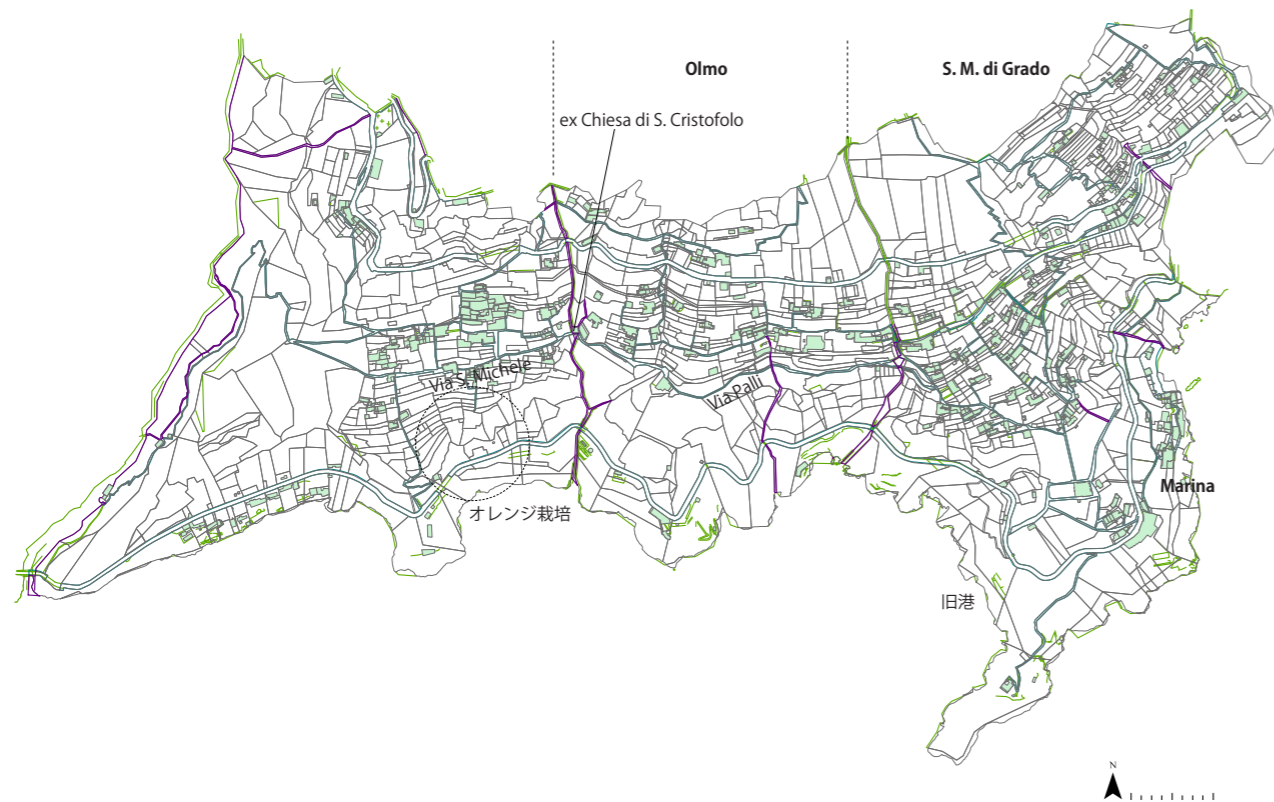
アマルフィ、あるいはサレルノなど、他の都市に普段は住みながら、故郷であるコンカで夏の間、親や親戚と一緒に楽しく過ごす人々の姿がどの家でも見られる。ローマ、ナポリの大学で学ぶ子供たちも夏の間、長期、帰郷する。

豊かな自然、長い歴史に裏打ちされた独自の文化を誇り、美味しい料理、ワインを楽しめる小さな町が、このコンカをはじめアマルフィ海岸には幾つも存在する。今日、イタリアの各地でこうした嬉しい出会いを体験でき、そこにこの国の底力を感じ取れる。二十一世紀に生きる 我々にとって、まさにサステイナブルな地域の生き方をここから学べるのではなからうか。

陣内秀信

コンカ・デイ・マリーニはもともとはアマルフィに付属していたが、アンジュー家時代に独立した自治体 Università となった町である。中世から四つの地区 contrada があり、それぞれは教区でもあった。サンタ・マリア・ディ・グラード S. M. di Grado 地区には13世紀創建の教会が建ち、17世紀には修道院も建設された。オルモ Olmo 地区は民衆の象徴であるニレの木が名前に付けられており、サン・ミケーレ・アルカンジェロ教会 Ch. di S. Michele Arcangelo がかつての教区教会であった。ペンネ Penne 地区は11世紀頃にさかのぼる最も古い地区で、住居が密集しており、サンタントニオ教会 Ch. di S. Antonio(現サン・ジョヴァンニ教会 Ch. di S. Giovanni) が地区教会であった。マリーナ Marina 地区は13世紀頃に起源を持つ地区で、住民の多くが半農半漁の生活を営んでいた。サン・パンクラツィオ教会 Ch. di S. Pancrazio が地区教会であった。

海岸線の中央部分が弓なりになっており、南東、南西からの海風から守られ、比較的波も穏やかである。そのため、13世紀頃には東側に交易のための港がおかれていた。また、西側ではオレンジやジャガイモなどを作っていた。一方、高い位置にある畑ではトマト、レモン、オレンジを栽培しており、かつては桃や洋梨も生産していたが、現在ではほとんど栽培していない。風を受ける岬の、耕作に不向きな土地ではオリーブが植えられていた。



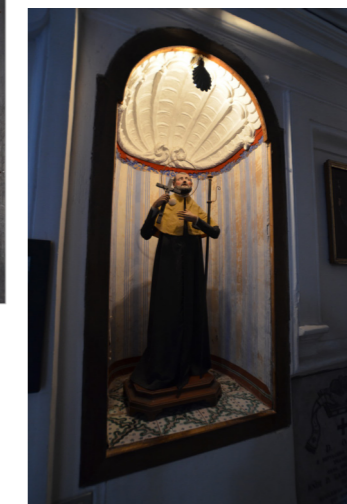
□サン・パンクラツィオ・マルティアーレ教会

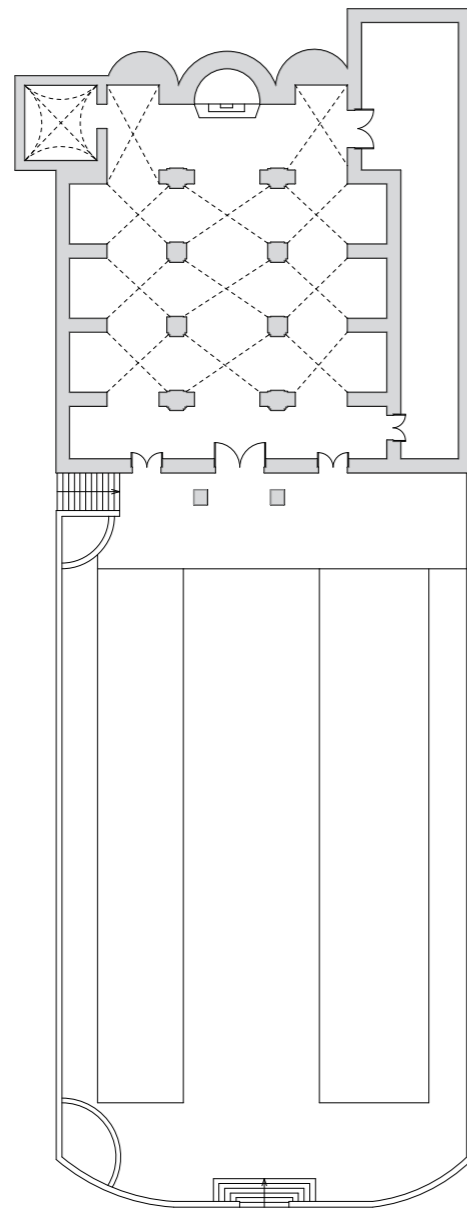
Chiesa di San Pancrazio martire

コンカの岬に建つ教会で、周囲をオリーブ畑に囲まれている。史料上の初出は1370年だが、その後何度も改築が加えられ、内部はバロック様式で、ファサードは1930年代に再建されたものである。しかし、側廊の左側にある物置部屋には、14世紀のリブ付き尖頭交差ヴォールトが残っていて、かつては女性専用の出入口だったという。聖具室にもヴォールトが架かっていたが、司教館を3階に増築した際に取り除いた。また、後陣のクーポラには16世紀のフラスコ画が残っており、内陣の祭壇は17世紀のものである。教会前は広場ではなく、周囲を壁で囲まれた前庭で、1543年に建設されたものである。

5月12日の聖パンクラツィオの日には、宗教行列が行われる。サンタ・マドンナ・デル・カルミネも奉っており、7月16日にも宗教行列が行われる。

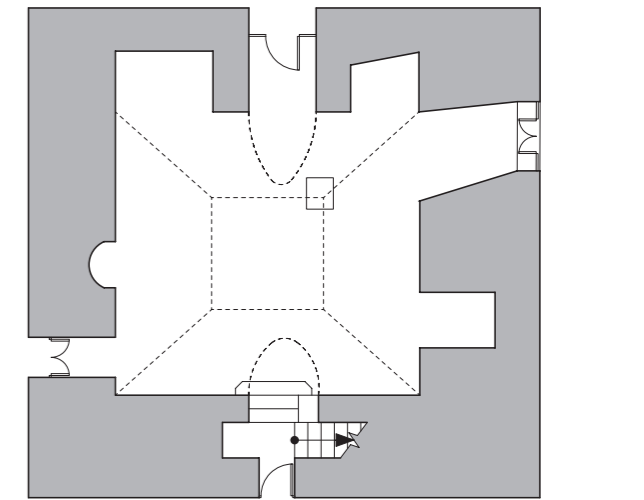
1772年に亡くなった年代記家ガエターノ・アモディオ神父 Don Gaetano Amodio は奇跡によって難破船を救出し、コンカの人々の信仰を集めた。そのため、教会内には難破している船に奇跡を起こしているアモディオ神父と聖母子が描かれた絵が多く残されている。1892年に奉獻された右側廊の礼拝堂にはアモディオ神父の墓石、肖像画とともに、1899年に難破した船の木片が置かれており、La Carmerina という船名を見ることができる。

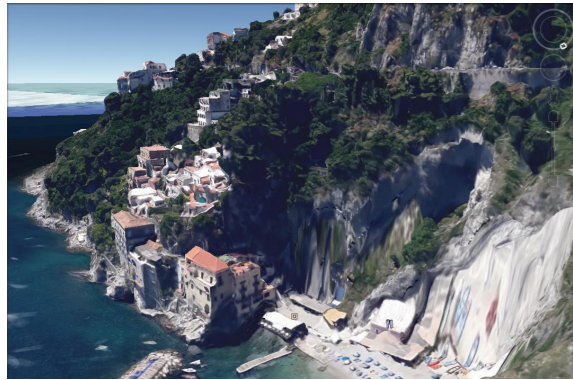




□見張りの塔 Torre del Capo di Conca

岬の先端に位置する見張りの塔で、アンジュー家支配期の1279年に起源を持ち、現在は16世紀に再建されたものである。建材は、近くの山から切り出してきた石灰岩を使っており、地下には貯水槽がある。18世紀には墓地として使われていたという。現在は市が所有しており、展覧会などが開催されるイベント会場として使われている。





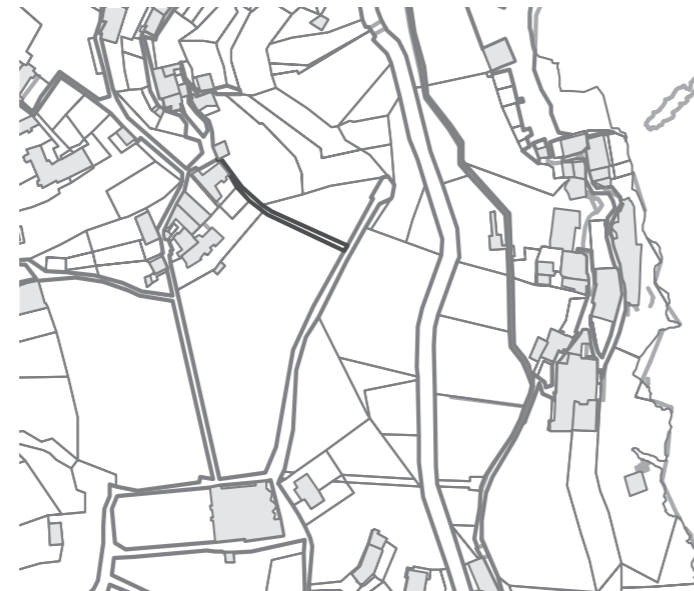
□港付近

漁師が多く住んでいた地区で、最盛期には150名ほどの漁師がおり、ナポリやサレルノへ魚を売りに行っていた。今でも漁が続いている漁師がおり、近隣のレストランに提供しているという。また、18世紀頃からマグロ漁も盛んで、1951年まで行っていた。北アフリカのリビアまで出掛けていくこともあったという。4月から11月のマグロ漁の時期には、上に住む農民も駆り出し、季節労働者として雇っていた。

入江の土地には所有者がいるが、慣習として市民の共用空間として使われ、船を係留したり、漁の網を干したりしていた。現在は、小さなビーチとして夏の間は海水浴客で賑わっている。

シャンパンで有名な酒造メーカーも海に面した建物を所有しており、保養所としているようだ。小さなビーチだが、静かな夏の休暇を過ごしには格好の場所で、かつてJ. F. ケネディー大統領夫人のジャクリーン・ケネディーがラヴェッロで夏のバカンスを過ごした際、コンカの海辺で一時を過ごしたこともあるという。

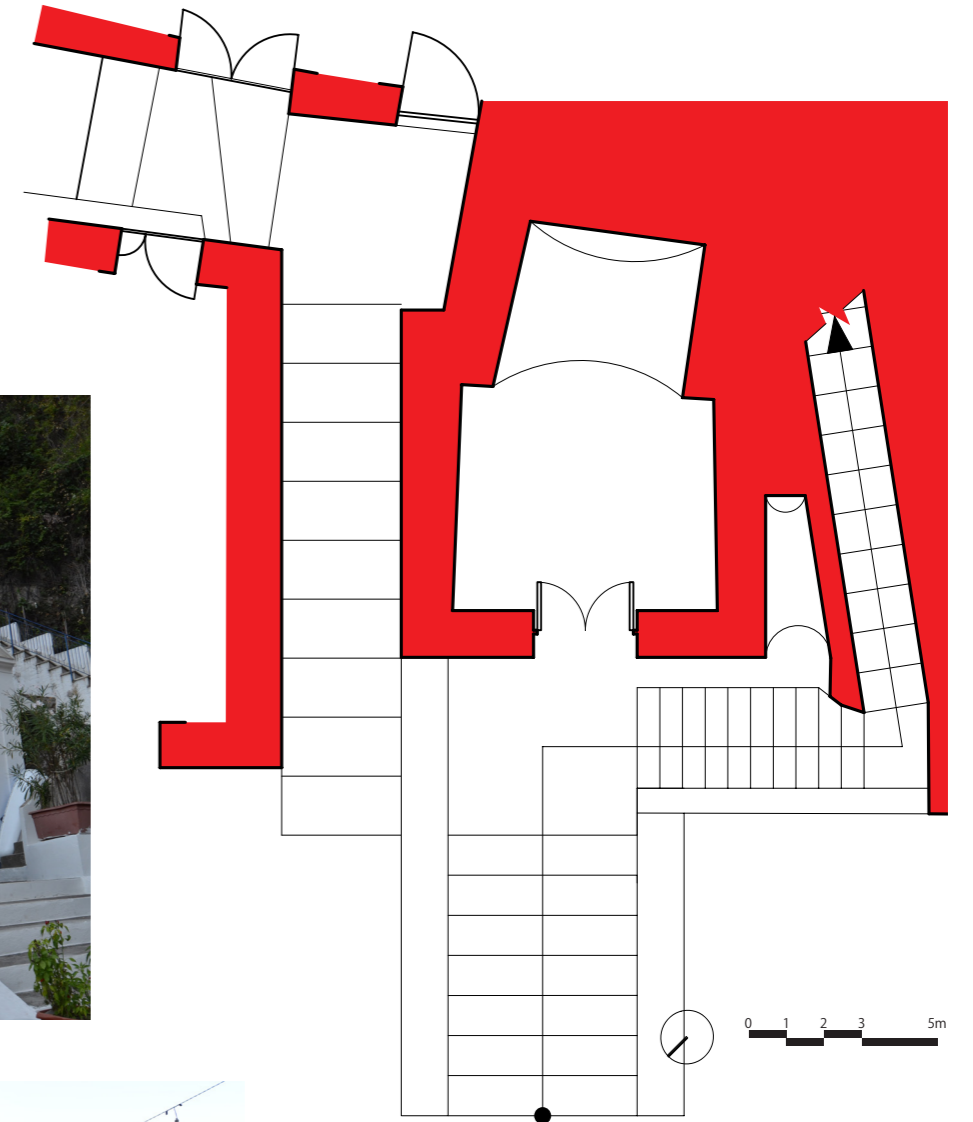
湾に面した1階部分にアーチのある建物は、かつてマカロニ工場(ex. Maccaronia dei Buonocore)だったが、現在は1階にバル、上階は住居となっている。また、浜辺の外れに建っているトンネルヴォールトの架かる建物は、かつては船の修理場であった。

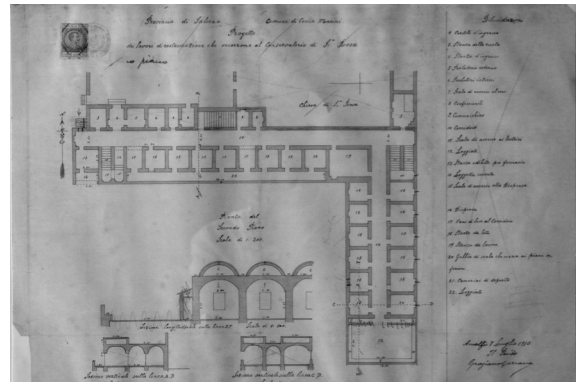


□サンタ・マリア・デッラ・ネーヴェ教会

Chiesa di S. M. della Neve

マリーナ地区の小さな浜辺に面した教会で、創建は13世紀にさかのぼるという。現在の建物は18世紀に建設されたもので、前面にある階段の先にあるファサードは、扉と三葉形アーチの窓だけの簡素なもので、単身廊の内部では外陣に平天井、内陣には扁平のトンネルヴォールトが架かっている。祀られているのは漁師の庇護者で、8月5日に行われる宗教行列ではアマルフィまで船で移動するという。





□ホテル「モナステロ・サンタ・ローザ」
Albergo "Monastero Santa Rosa"

1681年に女子修道院として建設された建物で、同名の教会が付属されている。1886年には修道女が転居させられ、1934年から主にビジネスマン用のホテルに転用された。1969年にはアメリカの旅行ガイドブックに掲載され、多くの外国人にも知られるようになった。1999年に滞在した現オーナーのアメリカ人女性、Bianca sharma氏が建物の購入を決め、2012年に長年の修復を経てリニューアルオープンした。

門を入ると、教会前にはアトリウムのような前庭があり、そこに修道院の入口も面している。修道院の雰囲気を残すために、案内係を呼ぶために入口脇には小さな鐘を吊り下げたり、廊下に置かれた告解室をホテルの客室アンケート用紙の投書箱として使ったりしている。また、オフィスとして使われている部屋は、修道院併設の薬局であったこともあり、客室には薬草の名前が付けられており、客室の扉には薬草の絵が描かれたタイルが掲げられている。

俗世間から隔絶された修道院のなかで暮らしていた30人以上の修道女と唯一、親戚家族が格子越しに会うことの出来た部屋が入口横にあるレセプションルームである。その部屋の壁面には、建設当時のものと思われるフレスコ画が描かれている。



裏にあるボチート山 Monte Bocito から引かれた2本の水路のうち1本は公共の泉へ、もう1本は道路を跨いで修道院の屋上にまで達し、建物内に水を供給していた。屋上に並んでいるトンネルヴォールトの屋根は、本来の屋根の上に重ねて架けられたものである。外側は小さく、内側は大きい開口部を設けて通風を良くし、夏は直射日光を避け、冬は干し草を入れていた。

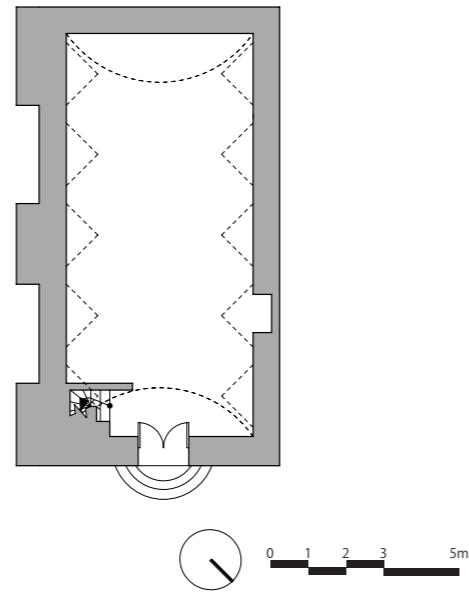
下にあった貯水槽はスパに、ワイン蔵・食料庫はエステティックルームに改築されている。客室は20部屋あり、58人の従業員が働いている高級ホテルで、宿泊客の8割が新婚旅行で訪れているという。道路を挟んだ山側にある菜園で採れた野菜は、ホテル内のレストランで提供されている。

付属の教会は修道院よりも起源が古いと思われる。2階には18世紀のオルガンが設置されている。



□インマコラータ教会 Chiesa dell'Immacolata

ヴィットリオ・エマヌエーレ3世広場、またはオルモ広場に面する教会で、1674年創建の教会である。もともとはパンドルフィ家の礼拝堂であり、床下に埋葬されている。単身廊の教会堂で、天井には16世紀末から17世紀頃の建築によく見られる爪形装飾付きトンネルヴォールト volta a botte unghiata (lunettata) が架かっている。祭壇や床細工は19世紀のものである。



□パラッツォ・ガンバルデッラ Palazzo Gambardella

海に突き出た岬の高台でコンカのなかで最も古くから集落があったと言われ、プンタ・デラルコ Punta del Arco と呼ばれる場所に建つパラッツォである。門を入り段々畑の間を通り抜けてと、2階のテラスに出る。1階にはバルコニーを支える大きな2連アーチが建物前面に架かっており、倉庫などに使われている。かつては、家の女性たちが仕立屋を営んでいた。

現在の所有者たちは、海水浴に来る時に滞在する家として利用しているが、曾祖父の時代からガンバルデッラ家は周辺一帯の土地を所有していたが、次第に分割されて縮小していったという。19世紀にガンバルデッラ家は船主となり、祖父は船舶操縦士となったが若くして亡くなり、曾祖父たちはアルゼンチンへ移住した。

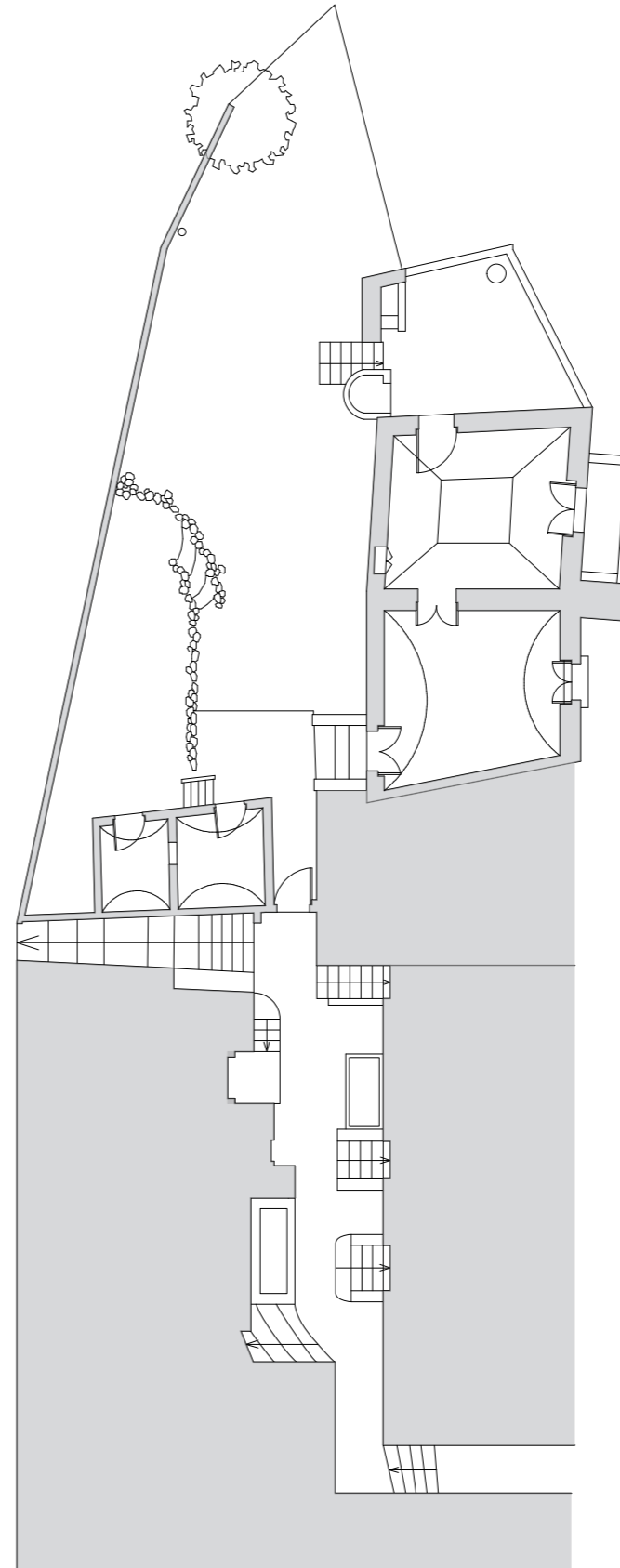
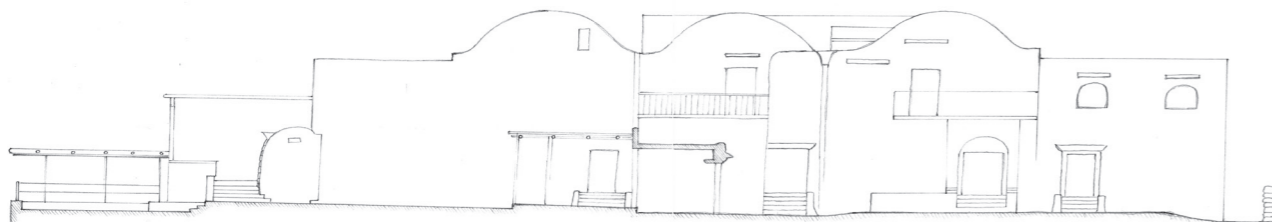
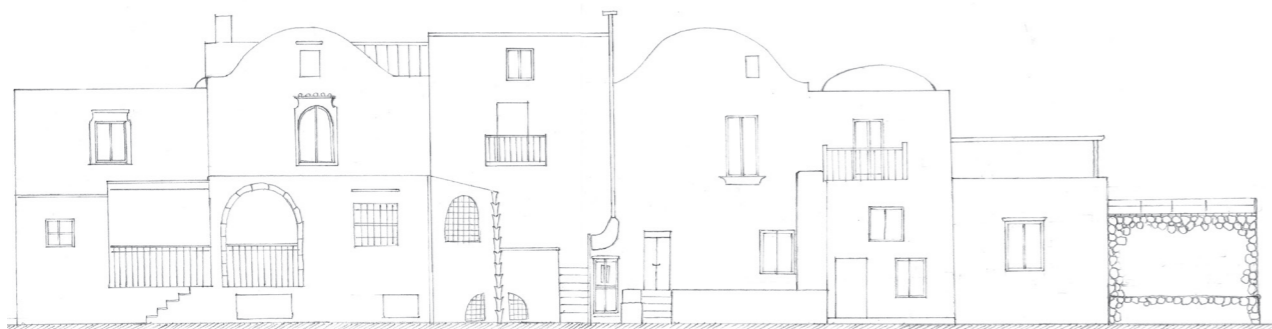




□建築家の家とその周辺

ホテル「モナステロ・サンタ・ローザ」のアメリカ人保有者になってからの責任者である建築家の住宅。25年前にバカンス用として、この地に家を購入した。それ以来、何度もコンカを訪れるようになったそうだ。住宅の中がバリ風の造りになっており、大きなバルコニーから海を一望することができる。

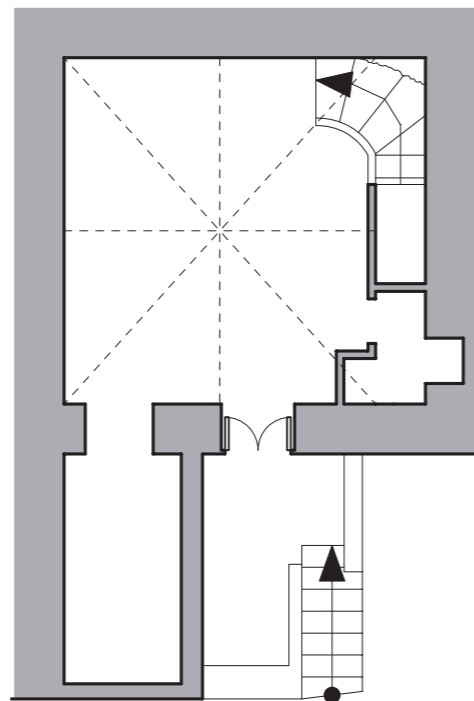
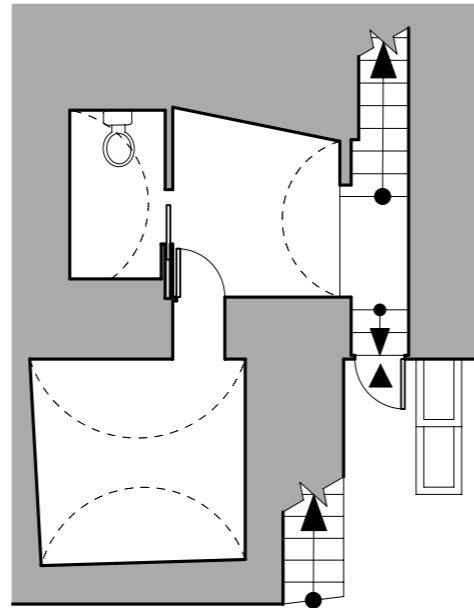
この建築家の家の周辺の道路は 19c 後半にセミプライベートな空間として整備された。その後、近代になってから公共の道路へと変わる。ガスや水道、バルコニーを作ったため、近代的な曲線的设计となっておる。住宅は外階段から入るものが多い。





□アーティストの家

5軒のスキエラ型住宅のうちの1軒が、本事例である。レチーナ通り Via Lecina 沿いにある街区で、レチーナ通りから分かれる二カ所には以前は鉄格子の門が付いており、セミ・プライベートの路地であった。斜面地の高低差により、住宅は谷側と山側の両側に入口を持ち、上下階で住居を分けている。谷側に地上階の入口と、外階段を上ったテラスに面した入口がある。連続する建物の揃っている壁面から飛び出しているテラスとその下の寝室は、増築によるものである。一方、既存部分はおもともと貯水槽だったところを浴室に変え、室内階段を新たに設けている。2階は居間の1室のみで、尖頭交差ヴォールトが架かっている。3,4階は山側に入口があり、屋上には交差ヴォールトの形状が露出している。文化財環境省によると、この5軒のスキエラ型住宅は17世紀前半に建設されたといわれている。



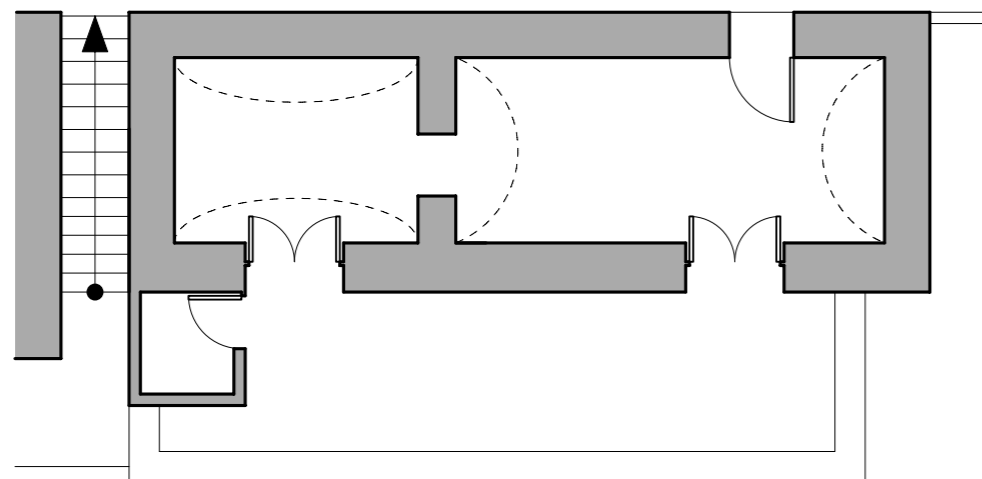
□ジェンマの家

ペンドーロ Pendolo、現地の方言でピエヌオーロ Pienuolo と呼ばれる山の上にある集落で、1960年代までは40人ほどが住んでいたが、その後ほとんどの家族が山を下りて、町へ移住したという。個々が独立した建物が多いコンカのなかで、この集落の建物は外壁が接しており、密集している。

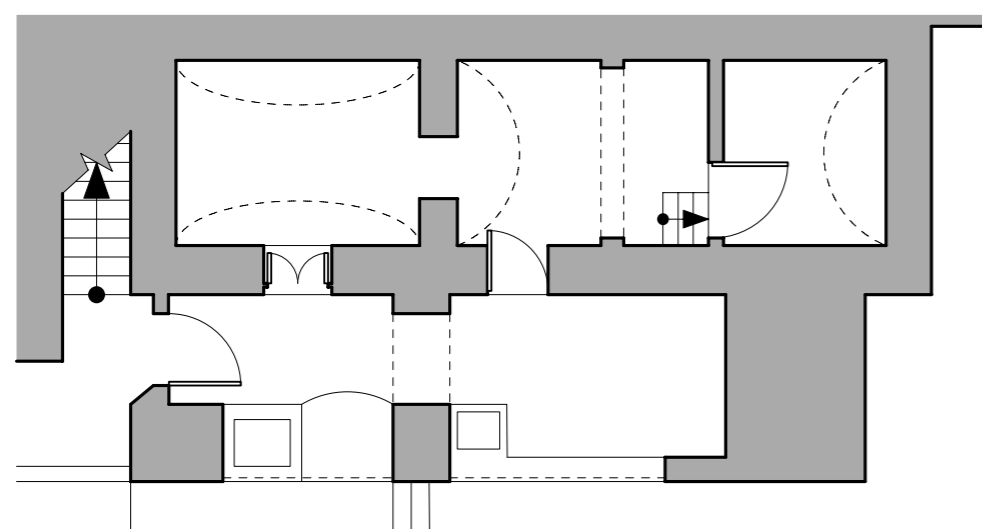
現在、唯一の住民であるG氏は、80歳を超える高齢の女性で、20年前に母親が亡くなって以降は、独りで暮らしているようだ。しかし、親戚や昔からの知り合いが生活を支えてくれていて、食料や生活必需品などを届けてくれているため、不自由なく生活できているという。S家の農場管理人とは親戚であったため、弁護士のPasqualeは子供の頃によく遊びに来ていて、今ではG氏の世話をしている。以前はオリーブの木が多く植えられており、その根元ではジャガイモと豆を交互に育てていた。また、畑ではトマトを栽培していた。G氏の父親は畑でトマトを育てながら、海まで下りていき夕方まで釣りをしていた。

屋上にトンネルヴォールトが見えるスキエラ型住宅が並んでおり、斜面地に建っているために上階は山側から、地上階は谷側の道からアプローチ出来るようになっている。





2層目



1層目



□サンタントニオ教会

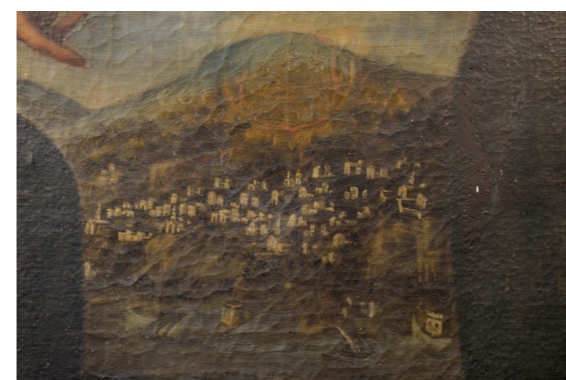
Chiesa di Sant'Antonio (Via Pali)

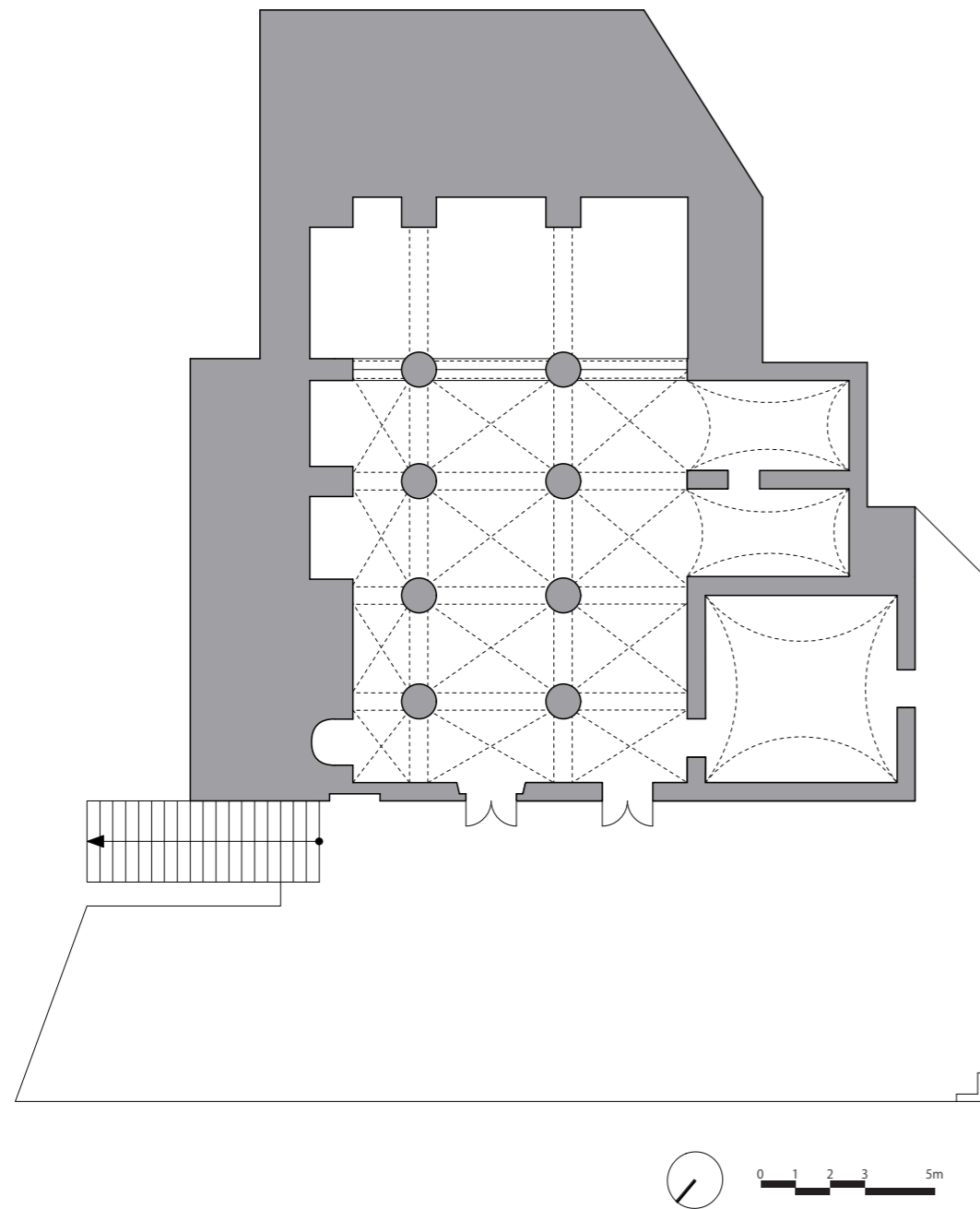
オルモ地区の斜面地に立地している教会で、海に向かって張り出した崖の上に建っている。史料上の初出は1416年と言われているが、現在の教会堂は19世紀末に再建されたものである。1909年には前庭が整備され、現在のような広いスペースが広がっているが、以前は教会前に墓地があった。また、海側には堡壘のようなテラスがあり、実際に戦時中は大砲が置かれていたという。聖具室もかつて病院（診療所）として使われていたらしい。

ローマのイル・ジェズ教会のようなヴォリュート（渦巻き）で飾られた2層構成のファサードは、ピラスターによってほぼ等間隔に分割され、中央には扉が三つある。しかし、左身廊に続くと思われる扉は疑似であり、壁面に他の木製扉と同様の模様を刻みつけて、ファサードに整った表情と中心性を与えている。

聖アントニオはコンカ・デイ・マリーニの守護聖人であり、6月13日の祝日には聖人像を信者たちが担いで教会堂を出発し、町の中を巡って、サンタ・ローザ教会まで行くようだ。

教会内部の祭壇に掲げられている絵画には、ユリの花を持つ聖母子を見上げる聖アントニオが描かれているが、その背景には山の斜面地に家々が点在する集落が見える。コンカの町を描いたものと思われ、海面には近いところには見張りの塔が二つあり、絶壁の上には四つの教会が建っているのが分かる。





□パラッツォ・パンドルフィ Palazzo Pandolfi

16世紀にスカーラ Scala のフラツィオーネ (分散集落)、ポントーネ Pontone から移住してきたコンカの有力家、パンドルフィ家の邸宅である。子孫が途絶えたため、Vittoria Pandolfi が1680年にはサンタ・ローザ修道院に寄進した。

塔と住居棟で構成されており、現在はそれぞれ分割して所有されている。塔には開口部が少なく、屋上に狭間がある。裏庭にある外階段を上った3階は、パヴィリオン・ヴォールトが架かっており、改築によってロフトを設けて、現在は貸し部屋として利用されている。地下には6mほどの深さの貯水槽があり、以前はメロンなどの果物や野菜を水に浸して冷やしていたという。塔の1階、2階は20年ほど前に建物の一部を購入したアナスタシオ Anastasio 家の所有で、1階は倉庫として使われている。倉庫に置かれた網や釣り針は漁師である息子の物で、地元のレストランや魚屋に卸しているという。2階は改築によって隣接する住居棟と内部で繋がられてアナスタシオ家の台所となっている。一列に並んだ住居棟2階の部屋は、玄関ホール、居間、子供部屋、主寝室となっている。

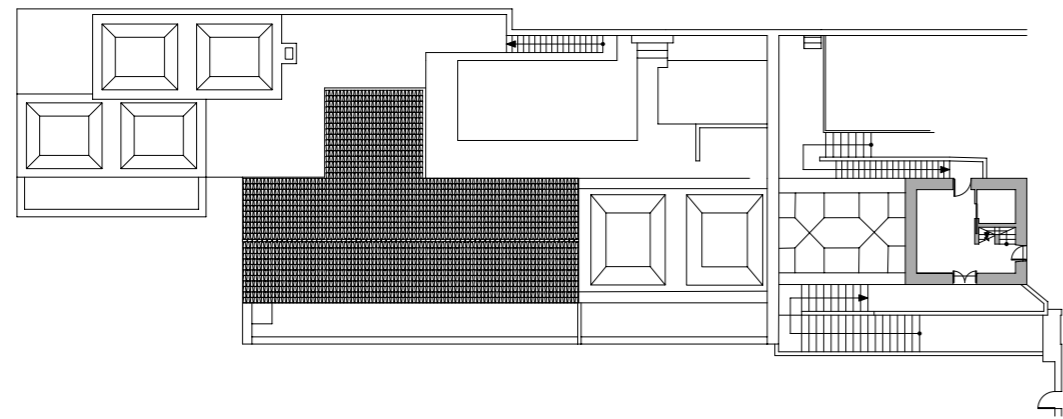


住居棟の3階には、トッレ通り Via Torre に面した切石積の門から裏庭を通して入る。裏庭はトマトなどを育てる菜園で、かつては羊や牛、豚を飼っていた。サンタ・ローザ修道院からアマルフィ司教区へ移管され、現在3階部分は貸宅住宅となっている。入口から居間兼台所と二部屋の寝室が並んでいる。居間兼台所は平天井だが、寝室はそれぞれパヴィリオン・ヴォールトが、裏にある食料庫には尖頭交差ヴォールトが架かっている。ファシズム時代に隣の行政区フローレ Furore と合併した際、市庁舎として使われていたことがある。現在の住民である高齢の母親と娘は50年ほど前から住んでおり、20年前に亡くなった父親は蒸気船に料理士として乗船していたというのは船乗りの町コンカらしい話である。

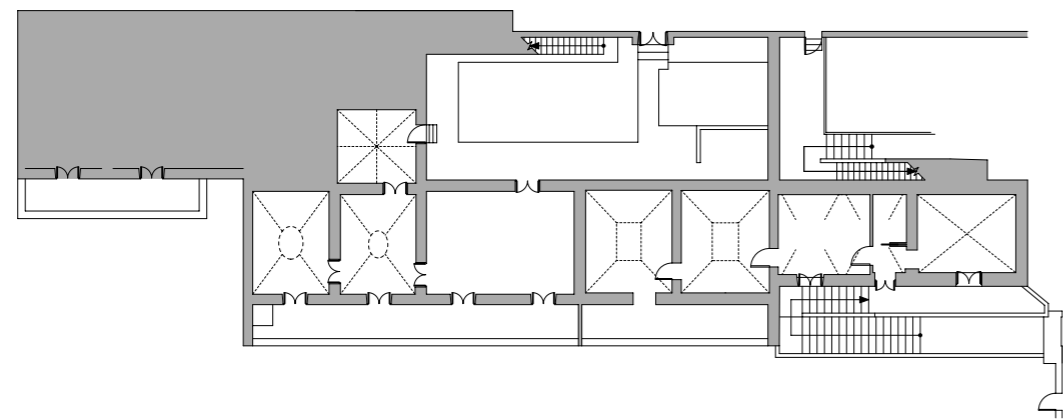


1階は貯水槽やワイン蔵、家畜小屋、オリーブオイル搾油所 (フラントーイオ) として使われていた。家畜小屋では鶏、牛、豚を飼っており、前庭は畑として耕していた。一部は住居として使われたこともあるようで、外部にトイレが増築されている。

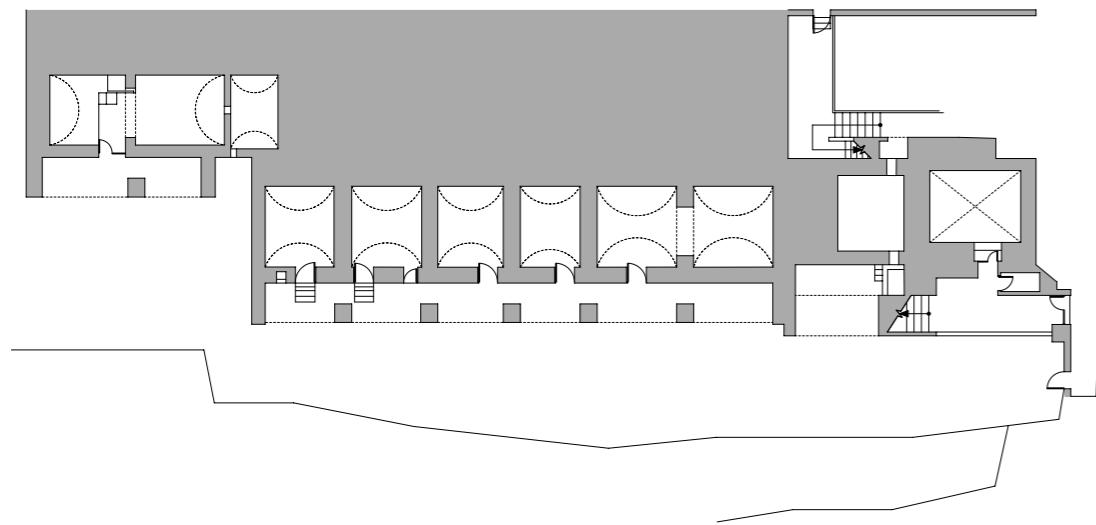




3層目



2層目



1層目

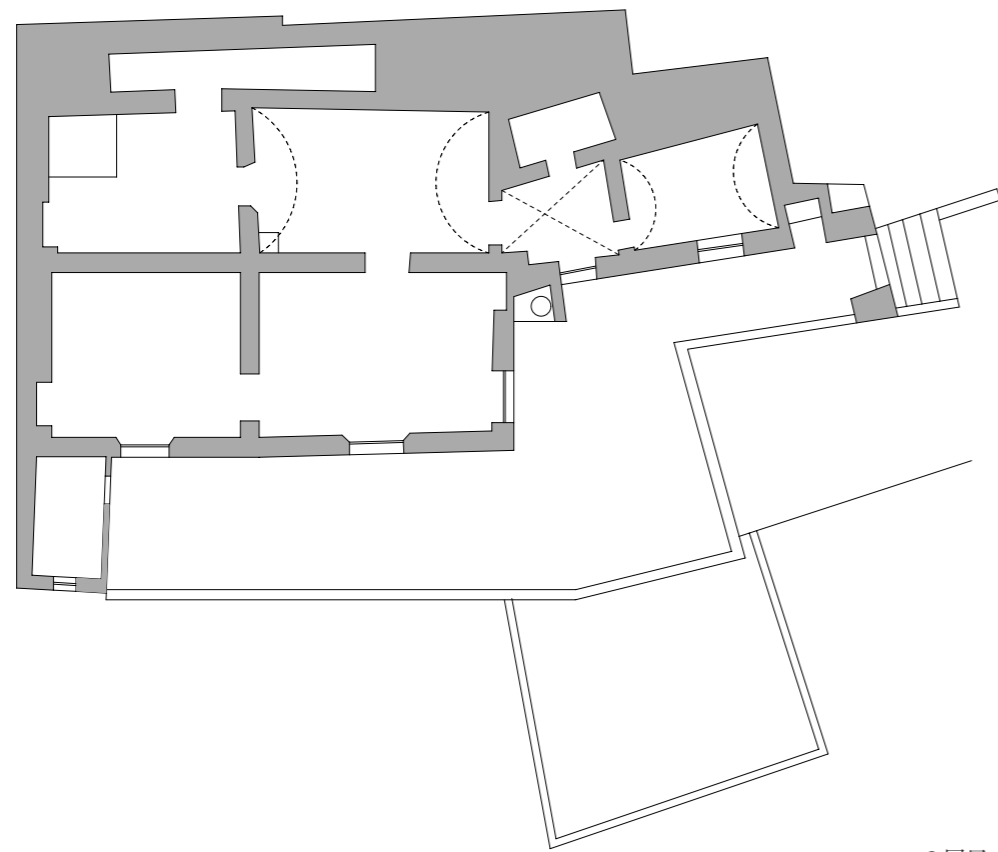


□マウロの廃屋

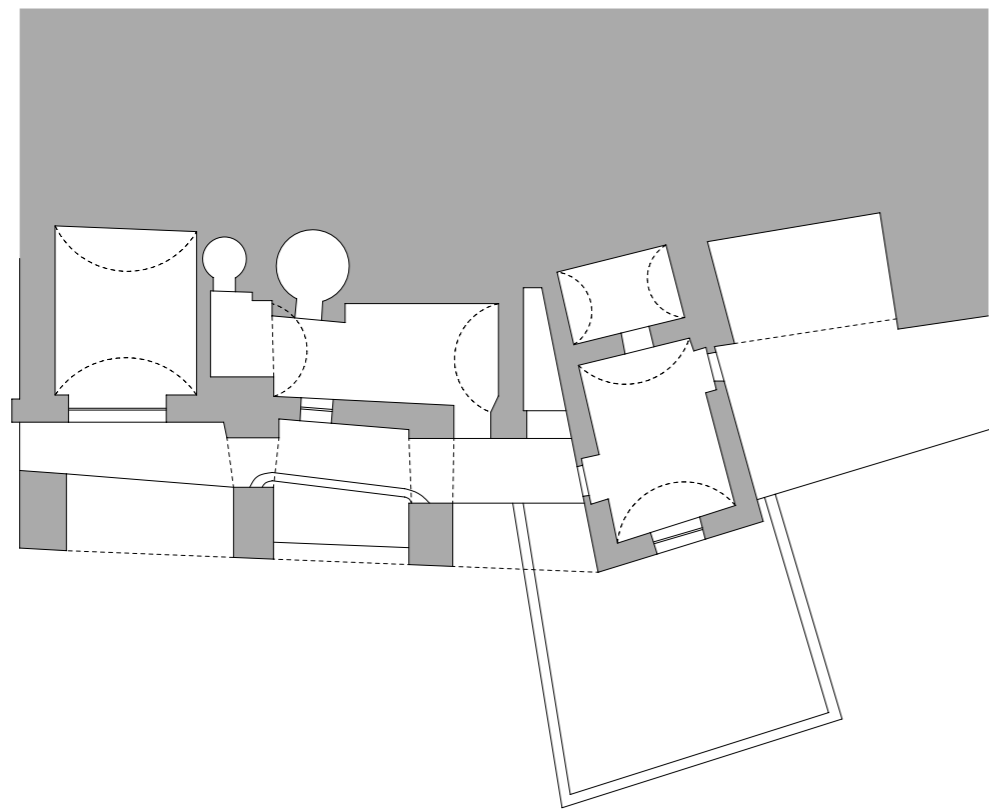
16世紀前半に建設された農家で、1階のポルティコとその上の広いバルコニーは18世紀後半に増築されたものと思われる。畑のなかに作られた細い道を進んだ先にある門をくぐると、バルコニーに出る。2階は居室と台所で、一部の部屋にはトンネルヴォールトが架かっている。バルコニーの端にはトイレと浴室が設けられている。バルコニーの下には貯水槽があり、上から汲むことも出来る。その他、1階にはパン焼き釜がある部屋と家畜小屋があり、1階の部屋には全てトンネルヴォールトが架かっている。

一族の所有については曾祖父の代、1850年代のブルボン朝時代まで資料でさかのぼることができるという。7、8年前までM氏の母親が住んでいたが、亡くなった時に氏を含む4人で分割して相続した。M氏は1階部分を相続して所有しているが、建物は空き家のままで、普段はアマルフィに住んでおり、週末になると近くの家にやって来るといふ。





2層目



1層目



□サン・ミケーレ・アルカンジェロ教会

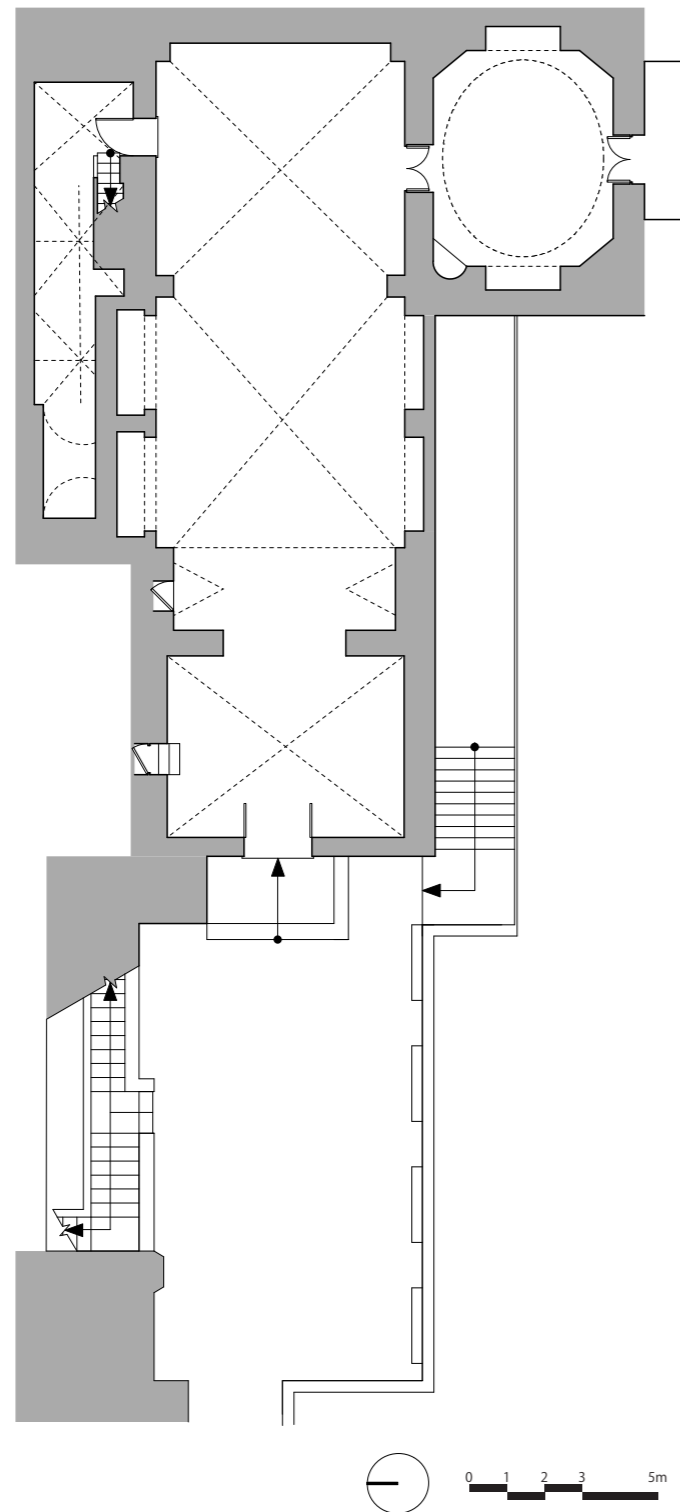
Chiesa di San Michele Arcangelo

史料によると1208年建設とされており、もともとは教区教会であった。ファサードは非常に簡素であるが、内部は18世紀頃のバロック様式の漆喰装飾が施されている。大天使ミカエルの祝日である9月29日に祭事が行われている。

単身廊の教会堂の左側にある尖頭交差リブヴォールトが架かった狭い部屋には、講壇に上がるための階段がある。ヴォールトの形状から、階段や身廊左側の祭壇部分は、改築によるものと考えられる。また、後陣の右側に入口がある聖具室には、八角形の部屋に角丸長方形ヴォールト天井が架かっていて、教会の横を通るサン・ミケーレ通り Via S. Michele を覆っている。教会前広場から正面左側に伸びる階段の先は司教館となっており、1980年頃まで使われていた。鐘楼に隣接しながら、交差ヴォールトが架かるナルテックスの上部を含めた2階部分が居住スペースであった。

教会前の広場は腰掛けが備えられており、特にミサの後などには大勢の住民が集まる場であった。男性は商談などをし、女性は棕櫚の葉を編み、子供たちはサッカーなどをして遊んでいたという。棕櫚の葉細工は豊作の象徴として、毎年新しい物を家に飾っていた。コンカには棕櫚を栽培していたが、7、8年前に害虫が発生してしまった。





□弁護士の家 Palazzo degli Amodeo

オルモ地区にある邸宅の一つで、アマデオ Amadeo 家が所有していた。現在の所有者である弁護士 S 氏の曾祖父 Pietro Paolo 氏がアマデオ家の娘と結婚したが、アマデオ家は途絶えたためにブオナクオーレ Buonacuore 家の手に渡った。

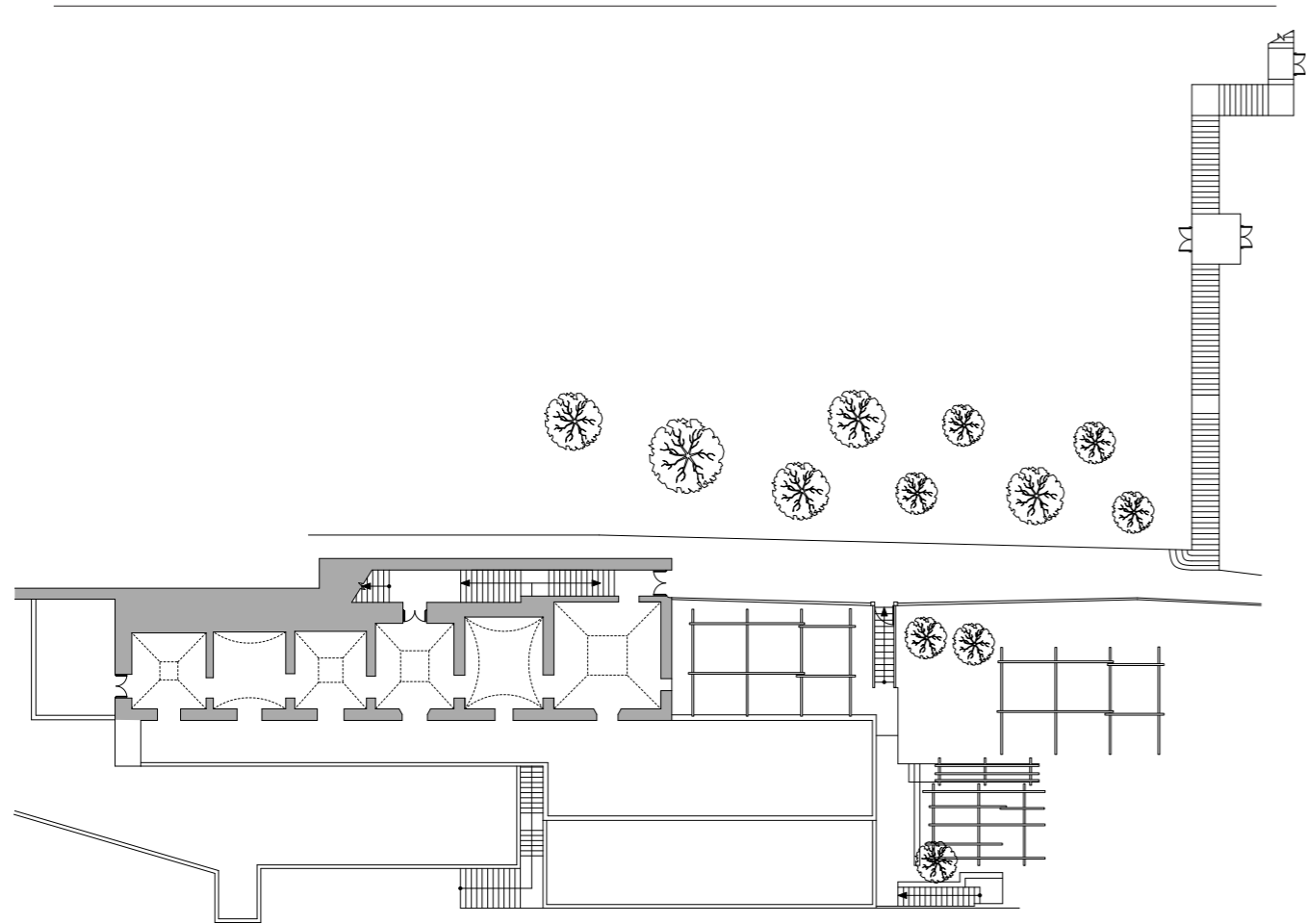
見晴らしの良い斜面で、教会の近くに位置している。周りには農地が広がり、農業経営者が下の階に住んでいた。見晴らしの良い立地にあることから、上流階級の家だということが分かる。目の前の道路は 17c になってから出来たもので、昔は畑が広がっていた。現在は横にレモン畑やブドウ畑が広がる。

下の住戸にはキッチンに立派なヴォールト天井が残っている。また、トイレの跡が道路側に張り出ている様子もわかる。動物小屋は建物の外にあった。このことから、この建物が高貴な建物だったことが分かる。

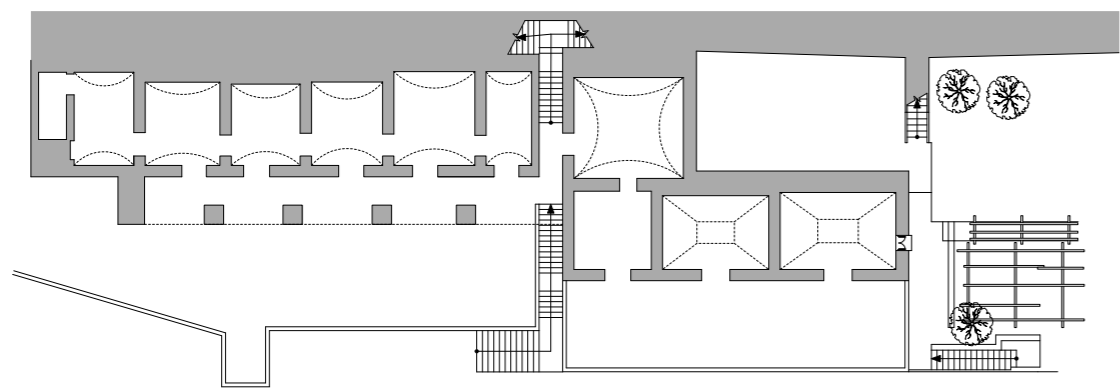
上の住宅はユネスコによると、16c 末のヴィッラである。テラスに貯水槽が残っている。所有者の曾祖父はノチェーラにビジネスの拠点を置きながら、船を持っていた。

ヴォールトには屋根がかかっている、ヴォールトを隠すことで、格式を高く見せる手法が使われている。

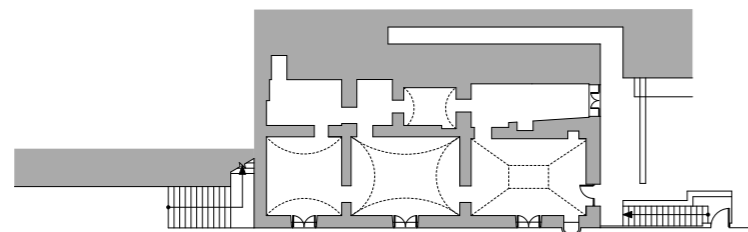




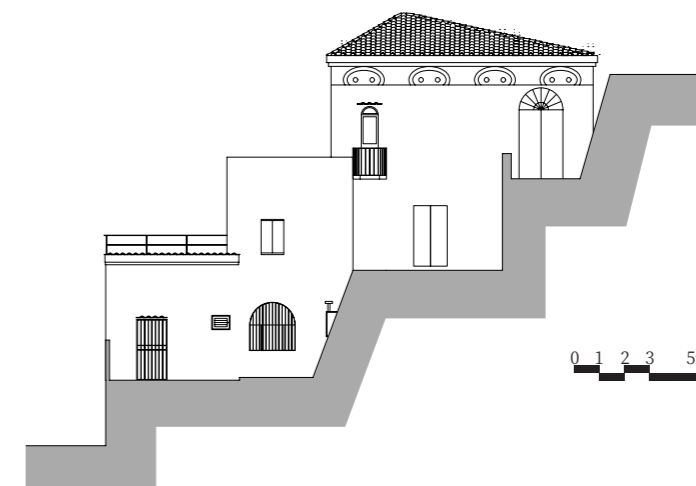
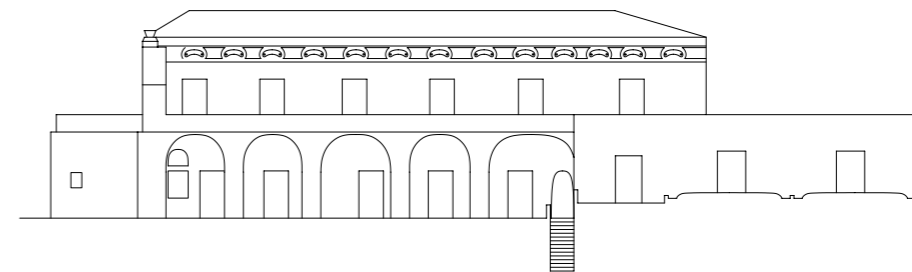
3層目



2層目



1層目





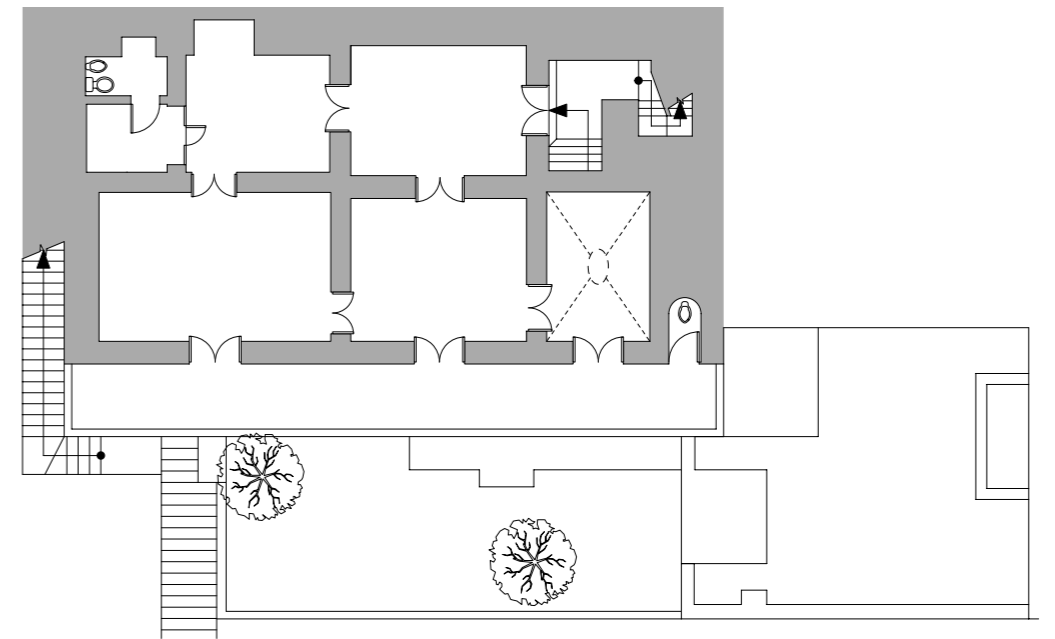
□ステファノの家

17世紀に建設された時は2階建てだったが、現在は3階が増築され、建物の裏から入れるようになっている。1階にある台所はかつては牛小屋であり、隣の居間から牛を出し入れしていた。1900年頃に台所へと改築された際に前面の扉が設けられ、居間も部屋を二分する横断アーチで貯水槽と廊下に分かれていた名残である。奥の食料庫にはかつて室内階段や梯子で、2階に上がることが出来ていた。以前は水を汲み上げる井戸口があって、2階からもつるべを使って汲むことが出来ていたという。2階は居室になっており、前面には寝室が並び、後ろ側には書斎や家事室、浴室が並んでいる。曾祖母の時代には、寝室は夫婦の部屋のほかに、男児用と女児用に分かれていたという。前面のポルティコの上にあるバルコニーは増築されたもので、端にはトイレが設置されている（現在は使用していない）。2階にもヴォールトが架かっていたが、3階の増築時にほとんどの部屋は木の梁と天井に変えられている。

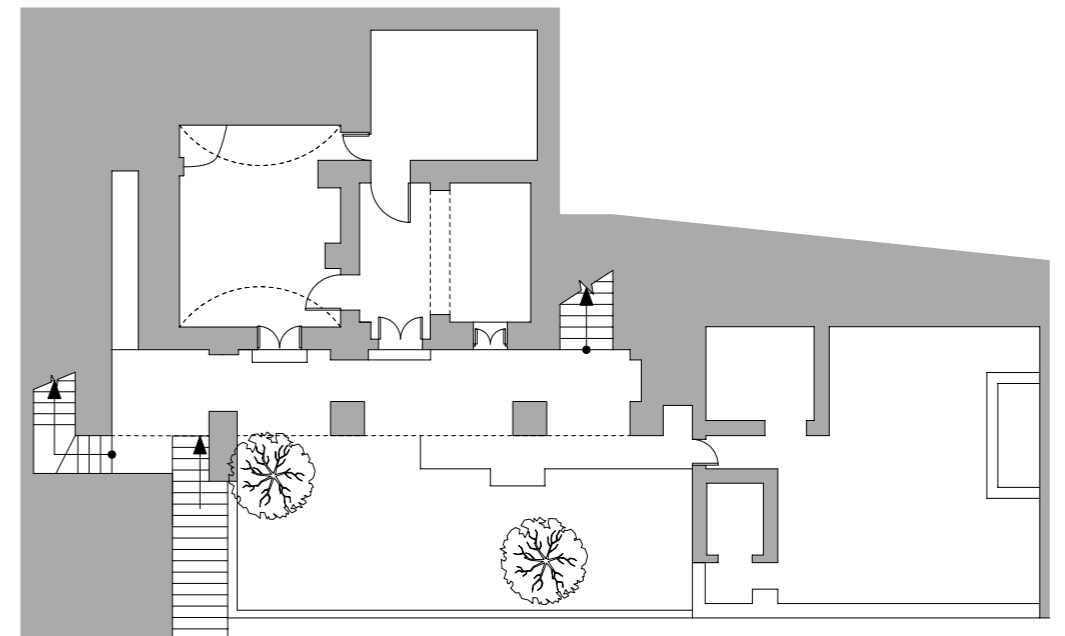


建物の前面には庭があり、パラスターのある欄干の先では眼下に海が広がっている。一方、壁で仕切られた隣の区画は菜園になっており、建物に隣接して倉庫と豚小屋が建っている。隅では石灰を作っていたという。

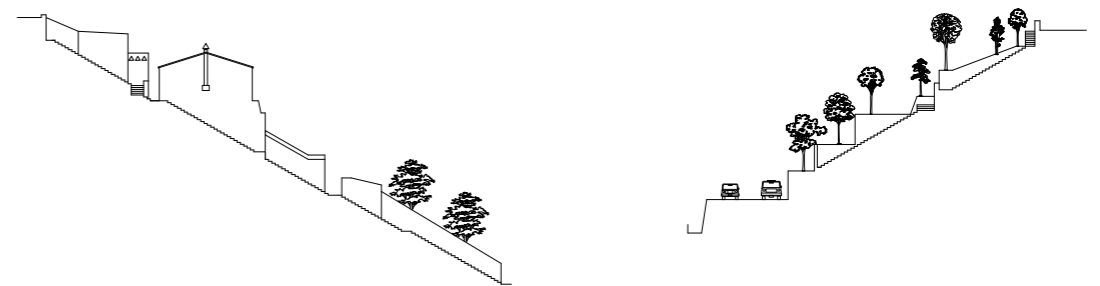
所有者のS氏は現在ローマで暮らしており、コンカ出身の母親は父親の出身地であるナポリに住んでいる。2年ぶりに生家で夏季休暇を過ごすために帰省してきたところで、3階は貸し部屋として利用している。



2層目



1層目



Il toponimo Conca compare nelle fonti documentarie soltanto nel XIII secolo e nella forma Concha Amalfie, denotando, quindi, che era un casale di Amalfi, cioè uno dei dieci villaggi della città posti lungo la costa occidentale ¹.

Con l'avvento degli angioini (1266) il casale di Conca fu promosso a terra, diventando sede di una Universitas, cioè un municipio a se stante, non dipendente più da Amalfi ². Fu allora che la comunità di Conca assunse il suo stemma araldico, rappresentato da una conca d'oro in campo d'argento, sormontata da un giglio angioino d'oro ³; così la conca d'oro richiama il nome dell'Universitas, nonché la forma topografica della zona bassa litoranea, che si apriva come una conca sul mare.

Questa evoluzione politica era di certo la conseguenza dello sviluppo graduale degli abitanti, che da semplici contadini e pescatori si trasformarono in abili mercanti-navigatori. Così il crescere della loro ricchezza individuale consentì al casale di aumentare i suoi abitanti, che costruirono case anche di tono più signorile, chiese e fortificazioni.

La terra di Conca aveva e ha tuttora uno sviluppo topografico verticale, come Vettica Minore, Furore, Praiano, Positano: sale dal mare verso i monti. La sede dell'Universitas (seggio del popolo) si trovava in una posizione centrale rispetto al territorio, a metà strada tra i monti e il mare, in una località denominata Olmo, per la presenza di un albero omonimo, simbolo del sedile del popolo. Lì la comunità conchese eleggeva ogni anno il sindaco e gli amministratori, tra cui un giudice, un baiulo (magistrato della giustizia civile), un maestro d'atti (segretario), un maestro giurato (capo della polizia) ⁴.

Il primo documento che menziona un sito di Conca risale al 1025 ⁵: esso indica il luogo di Penna, collocato sull'estremità occidentale della terra. In quel tempo lì vi erano terrazze coltivate con macerine, nelle quali erano impiantati vigneti; nelle vicine case rurali si produceva il vino mediante la torchiatura delle uve (palmentum et lavellum). Alcuni proprietari di quel luogo, che si chiamavano de Penna, avevano raggiunto un livello sociale di rispetto, assumendo il titolo di dominus. Questo è certamente un primo segno dell'ascesa sociale, collegata ad attività economiche, già in atto al tempo della repubblica autonoma.

D'altronde sin dai primi tempi del ducato di Amalfi (X secolo) doveva essere attivo il porto di Conca, costituito da una rada distinta in due sezioni da un promontorio nel mare ⁶; si trattava, quindi, di un porto naturale, nel quale potevano trovare protezione i navigli sia dalle tempeste di libeccio che da quelle di scirocco, riparandosi all'occorrenza ora in un bacino ora nell'altro. Un'antica tradizione vuole che nel Portus Conche Amalfie fosse sbarcato il corpo dell'Apostolo Andrea, quindi ospitato nella chiesa di S. Michele Arcangelo di Penne ⁷ per più di un anno, dopo che il cardinale amalfitano Pietro Capuano l'aveva trasportato da Costantinopoli: poi, l'8 maggio 1208, un corteo di nove galee, che rappresentavano le parrocchie della città di Amalfi, scortarono le sacre spoglie, che furono tumulate nella cripta della cattedrale ⁸.

La rada portuale fu protetta da una torre antincursiva, che aveva il compito di scoraggiare l'ancoraggio di navi siciliane o pisane dapprima (XIII-XIV secolo) e barbaresche poi (XVI secolo), pronte ad attaccare i convogli che trasportavano il grano dalla Puglia a Napoli ⁹. La torre, rifatta nel XVI secolo per l'applicazione delle armi da fuoco, fu edificata intorno al 1279 ¹⁰. Dalla sua sommità i soldati di guardia usavano un codice segreto per avvertire contemporaneamente altre due simili torri circa l'imminente attacco di navi nemiche; il codice dei segnali, che di giorno erano di fumo e di notte di fuoco, era il seguente: 2 segnali se le navi erano meno di dieci; 3 segnali se erano più di dieci e meno di venti; 4 segnali se erano più di venti ¹¹.

In questa torre fu organizzato un fortino dai francesi nel 1799, che respinse l'assalto di navi inglesi e di

barche organizzate dai cetaresi filo-borbonici ¹². Lungo la costa protetta dal porto di Conca si sviluppava un villaggio di pescatori. Lì nel XVIII secolo vi era un'osteria che ospitava i forestieri giunti dal mare; nella rada portuale ancora sbarcavano bastimenti e feluche. Nel 1767 la marineria di Conca possedeva, oltre a numerose e piccole barche a vela, anche due vascelli e quattro tartane. Poi due feluche trasportavano il grano da Salerno in Costiera. Nello specchio d'acqua di Conca, verso sud, limitata dal promontorio ad occidente (Capo di Conca), era stata organizzata una tonnara per la pesca di tonni di cantara, di tonnacchi, di palamiti, di scormi, di storioni: per qualche secolo fu un'industria che produsse lavoro per una parte della popolazione di Conca, impegnata non solo nella pesca, ma anche nella salagione e nella conservazione del pescato ¹⁴.

Quando Conca passò da casale a terra sede di universitas, la sua popolazione era di circa 250 abitanti (1272/78 - Amalfi ne conteneva poco più di 2000) ¹⁵; allora la comunità pagava al re angioino una tassa bimestrale di 244 tari siciliani. Nel 1595 gli abitanti erano più di 400, mentre nel 1692 subì un netto calo, scendendo, forse a causa delle pestilenze, a circa 280 anime. I dati demografici riscontrati per i secoli successivi sono i seguenti: 1736 abitanti 642; 1760 abitanti 1523; 1800 abitanti 1341; 1881 abitanti 974 ¹⁶. Si nota un picco interessante negli anni '60 del XVIII secolo, dovuto ai guadagni procacciati dai navigatori conchesi e dalle industrie locali, tra cui quella ittica in aggiunta ad attività tessili femminili relative al lino, alla lana, ai merletti.

Allo scorrere del XIII secolo Conca aveva un'economia piuttosto florida; lo dimostra la sesta posizione tra i centri del ducato nella graduatoria per il contributo in denaro al mantenimento delle guarnigioni di soldati (880,65 tari). Purtroppo agli inizi del secolo successivo, a causa della Guerra del Vespro, combattuta tra aragonesi e angioini nel Tirreno meridionale (1282-1302), la crisi economica, segnata dalle carestie, dalle epidemie, dal blocco navale e dalla concorrenza dei mercanti catalani, colpì anche Conca; infatti nel 1308 l'Universitas di Conca ottenne la riduzione di 1/3 delle imposte dovute, a causa della penuria ¹⁷.

Nel corso del XVI secolo Conca e l'intero litorale del ducato di Amalfi erano sotto il tiro di frequenti tentativi di incursioni da parte dei corsari barbareschi, che combattevano al soldo dei turchi, allo scopo di destabilizzare la potenza spagnola a favore di quella francese. Nel 1543, a seguito di un attacco barbaresco, la comunità conchese decise di costruire un muro di protezione, alto 16 palmi (4 m.) e largo 2,5 palmi (0,625 m.), dalla località lo Pistello alla tribuna della chiesa di S. Pancrazio e da lì verso ponente fino ai beni di Giovanni Paolillo ¹⁸.

In età angioina (1266-1438) Conca forniva marinai per le galee di Positano ¹⁹.

In quel tempo Benenato de Penna di Conca era portolano dei porti tra Cetara e Policastro (1334) ²⁰; quindi esigeva le tasse portuali in una vasta area del golfo di Salerno. Intanto Angelo Ceraso (1352) era maestro credenziere delle gabelle del sale nelle province di Principato (attuali province di Napoli e Salerno) e di Terra di Lavoro (provincia di Caserta), praticamente in tutta la Campania ²¹. Così i conchesi partecipavano, come molti altri abitanti del ducato, alla gestione fiscale angioina.

Alcune famiglie di mercanti-navigatori erano allora molto ricche: ad esempio, la Sarcaja possedeva navi con le quali commerciava specialmente tra Amalfi o Napoli e la Sardegna ²²; Cubello Mele era mercante di spezie e operava soprattutto a Napoli ²³; i Cannata trattavano cotone; Cuzzello de Cantone era un abile mercante nel 1340 ²⁴. Addirittura Deotifece Andrea, figlio di Giovanni de Mattheo, nel 1286 ricevette in gestione il fondaco della Chiesa amalfitana di Tripoli di Siria per 29 anni ²⁵.

I conchesi nel corso del XIV secolo praticavano soprattutto la navigazione di cabotaggio: per questa attività Giovanni Sarcaja utilizzava una barcha provvista di una sola vela e di un certo numero di remi ²⁶.

Pandone Sarcaja era un ricco capitalista: era proprietario di tre navi che affidava ai conterranei Giacomo Cannata e Giovanni de Cantone. Queste tre navi furono attaccate nel 1352 dal veneziano Nicoletto Pisano, che ne catturò due, impossessandosi di merci del valore di 25000 fiorini d'oro (= 175000 tari siciliani). Pandone era in società con Angelo Gattola di Gaeta che con il suo panfilo trasportava merci per conto di Pandone. Spinto dalla tempesta, trovò rifugio nel porto di Modone o della Sapienza nella periferia del Peloponneso, controllato dai veneziani, che si impossessarono di merci del valore di 10000 fiorini (= 70000 tari siciliani) ²⁷.

Tra la fine del XIII e gli inizi del XIV secolo Giacomo Candido, figlio di Giovanni di Conca, risiedeva a Minori, dove possedeva un palazzo in riva al mare; egli ricevette il titolo di sire in virtù delle sue capacità

imprenditoriali ²⁸. Nel suo testamento, dettato nel 1312, lasciava, oltre a numerose proprietà, la somma di 1343,85 tari ²⁹.

I conchesi che vivevano stabilmente nella loro terra s'industriavano in attività agricole.

Così organizzavano, soprattutto tra gli oliveti, le reti per catturare le quaglie al tempo del loro ingresso alla Costa d'Amalfi (trasità de cotornicibus). Producevano legna dai loro boschi collocati nella parte alta del territorio. Praticavano la pastorizia, guidando greggi di pecore sulle alture dei Lattari.

Nel 1336 il prete Andrea Cannata e Marino de Penna decisero di costruire in un suolo della località Alatella, confinante con la giurisdizione di Agerola e presso il fiume Penise-Schiatro, che sfocia nell'attuale Fiordo di Furore, un mulino per le esigenze della Terra di Conca ³⁰. Così i conchesi s'impegnavano anche nelle attività produttive.

La terra di Conca era distinta, dal punto di vista topografico, in quattro contrade: la Marina, posta lungo il litorale nella zona bassa; l'Olmo, in posizione centrale e sede dell'amministrazione civica; Penna, nel versante occidentale; S. Maria de Grado, nel settore orientale a confine con il casale Vettica Minore di Amalfi. L'abitato era sparso e caratterizzato da case rurali affiancate da numerose terrazze a gradoni coltivate dapprima a vigneti e uliveti e poi soprattutto a limoneti. Ad esempio, nella località Purtirillo nel 1349 la famiglia locale dei de Ligorio possedeva una domus, la caratteristica dimora di tipo urbano, con vigna e oliveto ³¹; Angelo Russo, di Conca ma residente ad Aversa, nel 1377 comprò una domus con terra a Grado ³².

In queste contrade sorgevano alcune chiese, edificate nel corso del Medioevo.

Una delle più antiche era dedicata a S. Angelo e si trovava nella contrada Penna: essa è attestata sin dal 1208 ³³.

Dal 1362 è documentata la chiesa di S. Maria de Grado ³⁴; situata nella località omonima, divenne presto una delle più importanti della terra, a tal punto da estendere la propria denominazione alla contrada in cui si trovava. Divenne in seguito parrocchiale e chiesa del monastero di S. Rosa ad essa attiguo, anche se restò sempre di proprietà pubblica. Presenta un'interessante cupola centrale.

Nelle sue vicinanze la famiglia Mele fondò, nel 1362, la chiesa di S. Tommaso Apostolo ³⁵.

La chiesa principale della contrada Penna, di cui ne è tuttora la parrocchia, era dedicata a S. Giovanni Battista; essa è documentata sin dal 1374 e in Età Moderna fu intitolata pure a S. Antonio da Padova, culto che ancora oggi è vivo e praticato dalla devozione popolare ³⁶.

Nella parte bassa della terra di Conca, in una posizione panoramica al di sopra della marina, sin dal 1447 sorge la chiesa parrocchiale di S. Pancrazio ³⁷, che per alcuni decenni fu gestita da don Gaetano Amodio, storiografo erudito del Settecento amalfitano ³⁸. A lui il popolo dei navigatori di Conca nel corso del tempo ha voluto dedicare numerosi ex voto, rappresentati da dipinti rievocanti miracoli da lui compiuti sul mare, soprattutto salvataggi di marinai e capitani di navi conchesi ³⁹.

Nel 1681 la monaca nobile suor Maria Pandolfo, appartenente ad una famiglia di Pontone (Scala) trasferitasi a Conca, fondò il conservatorio o monastero di S. Rosa in località Grado ⁴⁰. La sua maestosa architettura rientra perfettamente nello schema edilizio della Costa d'Amalfi con le sue cupole estradossate allineate lungo il promontorio. E' stato oggetto di studio da parte di Maria Russo ⁴¹. La tradizione vuole che le monache di S. Rosa avessero inventato, nel corso del XVIII secolo, la celebre omonima sfogliatella, che in origine era una torta confezionata per sfamare i poveri.

-
- 1 Doc. del 1270 in CAMERA, Memorie, II, p. 556. I primi cinque casali occidentali, Pastena, Lone, Vettica Minore, Pogerola e Tovere, fanno tuttora parte del Comune di Amalfi; gli altri cinque erano Conca dei Marini, Vettica Maggiore, Praiano, Furore e Casanova (i primi quattro ora sono Comuni autonomi, l'ultimo fa parte di Furore).
 - 2 G. GARGANO, La toga e la spada: evoluzione delle Magistrature in Amalfi medievale, in "Rassegna del Centro di Cultura e Storia Amalfitana", N.S. a. III (XIII dell'intera serie), 6 (1993), p. 120.
 - 3 M. CAMERA, Memorie dell'antica città e ducato di Amalfi, II, Salerno 1881 (rist. anast. Centro di Cultura e Storia Amalfitana, Amalfi 1999), p. 555, n. 1.
 - 4 G. GARGANO, La toga e la spada, cit., p. 120. Il primo sindaco attestato è Bonaventura Spizzatortilo nel 1270 (cfr. CAMERA, Memorie, II, p. 559).
 - 5 Doc. del 1025 in PAVAR, I, pp. 5 s., n. IV.
 - 6 Esso era ancora funzionante in età angioina (cfr. doc. del 1270 in CAMERA, Memorie, II, p. 556). In quell'anno nel Portus Conche Amalfie trovò rifugio una nave sorpresa da una tempesta.
 - 7 La chiesa presenta un impianto architettonico del XII secolo.
 - 8 P. PIRRI, Il Duomo di Amalfi e il Chiostro del Paradiso, Roma 1941, pp. 25-36.
 - 9 F. RUSSO, Le torri vicereali anticorsare della Costa d'Amalfi. Immagini e suggestioni della guerra di corsa, Centro di Cultura e Storia Amalfitana, Amalfi 2002.
 - 10 G. GARGANO, Fortificazioni e marineria in Amalfi angioina, in "Rassegna del Centro di Cultura e Storia Amalfitana", N.S. a. IV (XIV dell'intera serie), 7-8 (1994), p. 83.
 - 11 Doc. del 1297 in CAMERA, Memorie, I, p. 522.

ABBREVIAZIONI DELLE FONTI DOCUMENTARIE

AMA: Gli Archivi dei Monasteri di Amalfi (S. Maria di Fontanella, S. Maria Dominarum, SS. Trinità) 860-1645, a cura di C. SALVATI e R. PILONE, Centro di Cultura e Storia Amalfitana, Fonti 2, Amalfi 1986.

ASA: AMALFI. Sergio de Amoruczo 1361-1398, a cura di R. PILONE, Cartulari notarili campani del XV secolo, 2, Centro di Cultura e Storia Amalfitana, Fonti 6, Napoli 1994.

CP: Il Codice Perris. Cartulario amalfitano X-XV secc., III, a cura di J. MAZZOLENI e R. OREFICE, Centro di Cultura e Storia Amalfitana, Fonti 1/I, Amalfi 1987; IV, a cura di J. MAZZOLENI e R. OREFICE, Centro di Cultura e Storia Amalfitana, Fonti 1/IV, Amalfi 1988.

FM: Archivio della Badia di Cava, Fondo Mansi, voll. 1-38.

PAVAR: Le Pergamene degli Archivi Vescovili di Amalfi e Ravello, I, a cura di J. MAZZOLENI, Napoli 1972; IV, a cura di L. PESCATORE, Napoli 1979.

PAVM: Le Pergamene dell'Archivio Vescovile di Minori, a cura di V.



La conformazione a terrazze di Conca dei Marini vista da sud



La parte a picco sul mare vista dal promontorio presso la chiesa di S. Pancrazio.



L'area attorno a Punta Pisciello con coltivazioni sparse a ulivo.

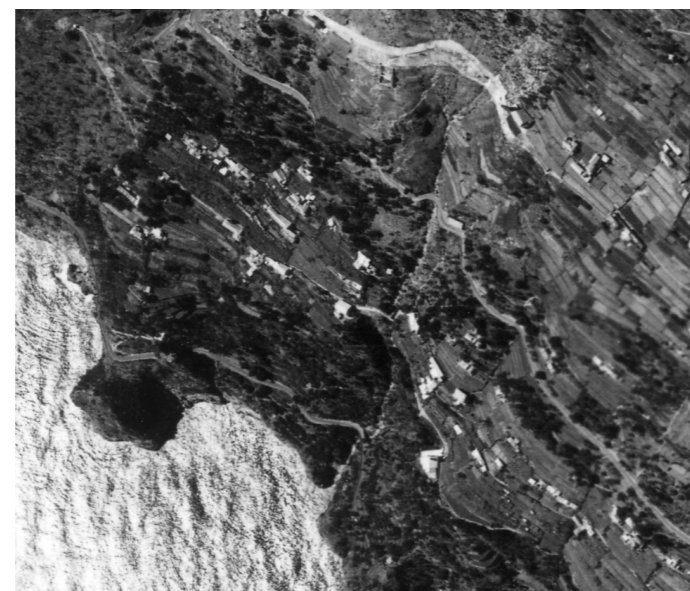


Dettaglio dei terrazzamenti a ovest del Convento Santa Rosa in un foto storica presumibilmente degli anni '40-'50.

Paesaggio agrario e approvvigionamento idrico a Conca dei Marini

Matteo Dario Paolucci

Il paesaggio agrario del comune di Conca dei Marini si differenzia notevolmente da quello della parte più meridionale della costiera compreso tra Amalfi e Maiori dove la continuità dei versanti e la maggior pendenza permettono una maggior percezione del paesaggio e dei numerosi terrazzamenti realizzati sulle pendici meno scoscese. Inoltre, la presenza modesta di colture agrarie contribuisce a rendere il paesaggio molto meno visibile rispetto ad altre parti della costa di Amalfi. Il motivo principale è da ricondurre alla particolare conformazione del territorio di Conca dei Marini che è caratterizzato da una sezione molto particolare: partendo da monte si osserva una sorta di altipiano con pendenze modeste che poi si accentuano repentinamente in corrispondenza della strada per Agerola al punto tale da non permettere nemmeno la realizzazione di terrazzamenti. A valle di tale strada la pendenza diviene più dolce concedendo una fascia sulla quale si sviluppa una prima serie di edifici per poi riaffermare la pendenza a livelli tali da permettere coltivazioni agrarie anche con l'ausilio saltuario di terrazzamenti. Ormai in prossimità della costa si sviluppa la strada per Positano che demarca la fine delle aree coltivabili e l'inizio della scogliera che



Dalle foto aeree del 1956 si distingue chiaramente la differenza tra la parte est e quella ovest di Conca dei Marini ove vi erano meno edifici e aree coltivate di maggior estensione.



Coltivazioni promiscue con frutti e ortaggi su terrazzamenti.



Vigneti a pergola su terrazzamenti nella parte nord orientale.



La coltivazione avviene prevalentemente senza terrazzamenti.



Coltura promiscua con ortaggi, vigneto e frutteto.



I terrazzamenti in abbandono nella parte settentrionale di Conca.

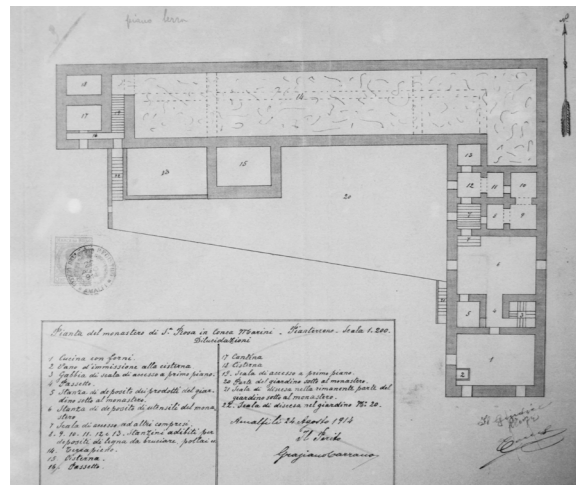
precipita a picco sul mare per diverse decine di metri. Una sezione così complessa non garantisce continuità al territorio agrario e tantomeno visibilità da molti punti in quanto le aree meno pendenti spesso impediscono la percezione di tutto il paesaggio circostante. In quasi tutti gli altri centri della costiera la sezione verso la costa è pressoché costante, tuttalpiù ha un salto nell'ultima parte verso il mare. In quest'ultimo caso la quasi totalità del paesaggio rurale viene terrazzato risultando facilmente visibile da valle.

A Conca dei Marini la conformazione del territorio è particolare non solo lungo la sezione trasversale della linea costiera; anche la presenza di lame geologiche, solchi erosivi di qualche metro di profondità in cui si riversano le acque meteoriche, influisce notevolmente nell'organizzazione spaziale del territorio. La loro presenza, costituendo anche un ostacolo dal punto di vista della viabilità, ha contribuito alla definizione di contrade ben distinte e afferenti alle rispettive chiese di S. Pancrazio, S. Antonio, S. Rosa, S. Michele. Tali lame rappresentano anche dei corsi d'acqua a regime torrentizio che scaricano le acque provenienti da monte e dal bacino di Agerola. Tale carattere torrentizio, non permettendo un approvvigionamento idrico costante, come anche l'assenza di fonti alternative di irrigazione, ha limitato lo sviluppo delle coltivazioni agrarie in questo settore della costiera.

Fino alla prima metà del '900 le colture più diffuse erano quelle che richiedevano il minor apporto di acqua ossia l'uliveto. Non a caso risultano essere attivi, nello stesso periodo, tre frantoi le cui macine sono ora reimpiegate come arredo urbano nei tipici tornielli. Vi erano poi altre colture diversificate e per lo più dedicate al sostentamento locale. Nella conca più riparata del comune, in prossimità della chiesa di S. Antonio, vi erano dei frutteti relativamente estesi con pesche e un particolare tipo di pera ora introvabile, inoltre, diverse palme dalle quali



L'area a nord e ovest del convento S. Rosa aveva una maggiore concentrazione di terrazzamenti e varietà culturale. Nella parte più occidentale si rileva la presenza quasi modulare di unità residenziali e relativa area coltivata a terrazzamenti.



Rilievo del convento di Santa Rosa datato 1914 e da cui si evince la presenza di almeno due cisterne (proprietà convento S. Rosa).



Parte terminale dell'acquedotto realizzato dal Convento S. Rosa



L'acquedotto del 1680 ca. approvvigionava le due cisterne del convento attraverso una complessa rete di canalizzazioni e tubature.



Dettagli delle canalizzazioni di approvvigionamento delle cisterne e fontana realizzata contestualmente all'acquedotto.

L'artigianato locale femminile produceva raffinati prodotti. L'area con coltivazioni più intensive era quella immediatamente a monte del convento di S. Rosa. Dalle foto aeree degli anni '50 si rilevano numerosi terrazzamenti da appena sopra il convento fino a oltre il confine comunale di Conca dei Marini.

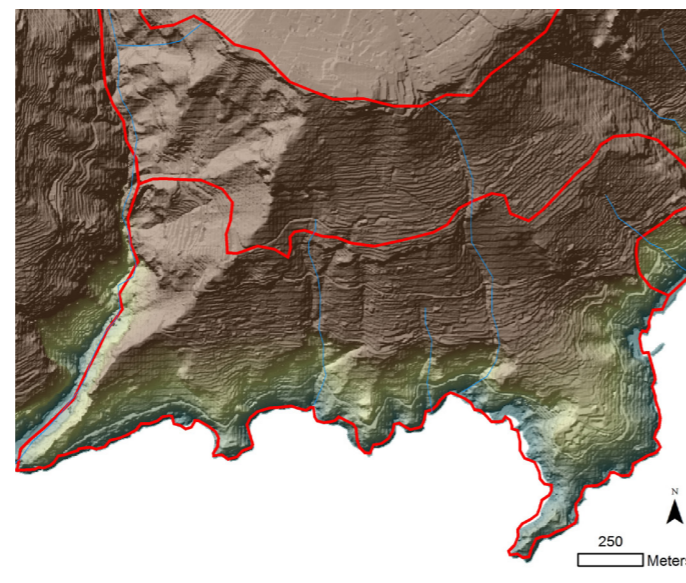
Nel corso della seconda metà del '900 gran parte delle coltivazioni sono state abbandonate, rimane solo qualche frutteto e orto nelle aree più prossime agli edifici e aree limitate coltivate a ulivi o vigneto.

La fascia più elevata del territorio comunale era caratterizzata da terrazzamenti molto ampi coltivati a vigneto e in parte a molti altri prodotti, in particolar modo il pomodoro ma anche agrumi come i limoni e le arance o patate. L'area immediatamente a monte e a ovest del convento S. Rosa era caratterizzata da un gran numero di terrazzamenti molto più stretti a causa della maggior pendenza. La presenza di animali come pecore, maiali e mucche era abbastanza frequente e contribuiva a completare il livello di autosostentamento della popolazione di Conca che ha continuato a preferire il baratto all'uso della moneta fino alla fine degli anni '50.

La distribuzione fondiaria era caratterizzata da proprietà a carattere latifondistico nella parte più occidentale di Conca mentre i braccianti risiedevano più nell'area di S. Rosa e S. Pancrazio. Le proprietà più estese, come nel caso della famiglia Amodeo, demandavano l'organizzazione dei lavori agricoli ad un campiere che poi ricorreva ai braccianti a seconda della forza lavoro richiesta dalle situazioni e stagioni.

Il sistema delle acque

La particolare conformazione geomorfologica del



Modello DTM del comune di Conca dei Marini, Tovere e l'altipiano di Agerola (DTM Lidar Ministero dell'Ambiente - Geoportale nazionale).



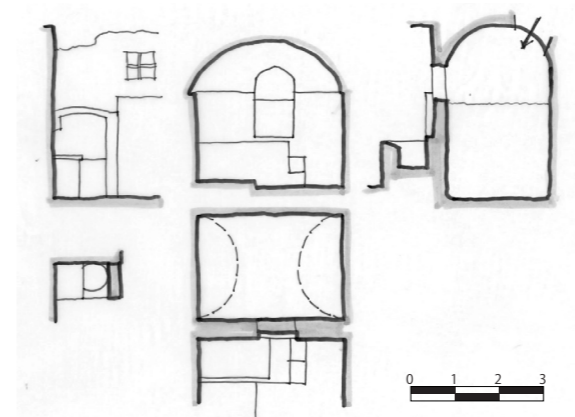
Porzione anticamente occupata dalla cisterna di cui rimane solo la canna di prelievo acqua da



Pozzo e relativa canna per attingere acqua dalla sottostante cisterna (casa Mauro).



La cisterna al piano inferiore con il riflesso del pozzo (sx) e la sua parte esterna (dx) dove si scorge anche una vasca e tre gradoni per raggiungere la cisterna.



Rilievo di massima della cisterna di casa Mauro e suoi principali elementi.



Esterno di casa Mauro.

territorio di Conca dei Marini ha probabilmente contribuito a rendere la disponibilità di acqua ancora più precaria che non nel resto della Costiera. Mentre nella maggior parte degli altri centri abitati ci sono dei corsi d'acqua che li attraversano o sono stati realizzati degli acquedotti in grado di approvvigionare il centro, Conca dei Marini, trovandosi non nel fondovalle ma su una sorta di promontorio, non aveva nulla di tutto ciò. L'unica sorgente si trovava nella parte nord-ovest del suo territorio, quasi al confine con Furore. Sembra che fino agli anni '40 alcuni abitanti si recassero fino al torrente Bottaro in prossimità del Fiordo di Furore per potersi rifornire di acqua. Dalla parte opposta del territorio di Conca il primo acquedotto venne realizzato nel 1680 circa contestualmente alla costruzione del convento Santa Rosa che ne ha previsto anche il suo prolungamento fino all'altezza di casa Pandolfi dove una fontana è stata messa a disposizione della comunità. Non è un caso quindi se tutti gli edifici erano provvisti di una o più cisterne. Delle sedici unità residenziali rilevate o visitate nel corso dei nostri rilievi tutte hanno, o avevano, cisterne. Delle 16 cisterne rilevate o di cui si è appresa l'esistenza 6 sono ancora funzionanti, 4 sono tutt'ora esistenti ma non più funzionanti in quanto al loro interno non vi è più acqua e 6 sono ormai state distrutte o il loro spazio radicalmente trasformato.

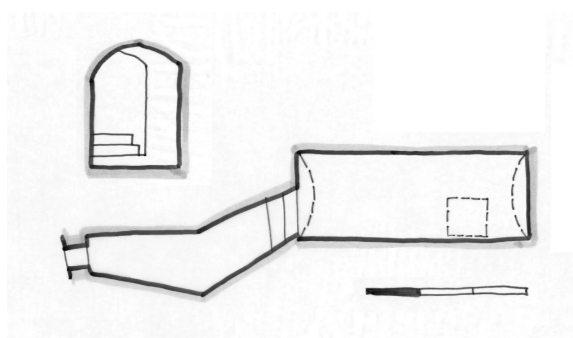
In base alle prime osservazioni e rilievi speditivi, quasi tutte le cisterne risultano scavate nel terreno o nella roccia da cui probabilmente ne è stato ricavato materiale da costruzione, solo in un paio di casi sono a quote più elevate rispetto a quella di calpestio del piano terra. La profondità, come anche le dimensioni, varia leggermente in funzione delle dimensioni dell'edificio e si attesta tra i 3 e i 4 metri anche se si hanno casi in cui raggiunge anche i 6 metri. La struttura di contenimento, laddove non sia naturale, è costituita da semplice muratura in pietra con malta di allettamento a base di calce. La sezione muraria è conforme alle dimensioni della cisterna e non scende mai sotto i 30 cm. La copertura è solitamente a volta a botte. Caratteristica indispensabile è l'impermeabilità delle pareti interne della cisterna, per tale motivo tutta la parte inferiore della cisterna è intonacata con un intonaco molto spesso costituito da uno strato di allettamento a base di cocciopesto e un secondo strato di finitura con pozzolana finemente lavorata. Lo spessore totale dell'intonaco può raggiungere i 5-6 cm. Nonostante diversi edifici risalgano almeno al diciassettesimo secolo, il loro stato di conservazione è ancora buono. La parte più critica riguarda la mancanza di manutenzione all'intero sistema di approvvigionamento che vede l'impiego di canoni di terracotta all'interno della muratura a collegare la copertura che svolgeva anche la funzione di accumulo delle acque piovane. Spesso tali condotti sono intasati o interrotti, vanificando quindi l'esistenza della cisterna. In quanto all'utilizzo,



La torre di Capo di Conca



La cisterna all'interno della torre di Capo di Conca



Rilievo sommario della cisterna all'interno della torre di Capo di Conca



Casa Pandolfi e, sulla destra, la torre (fam. Anastasio).

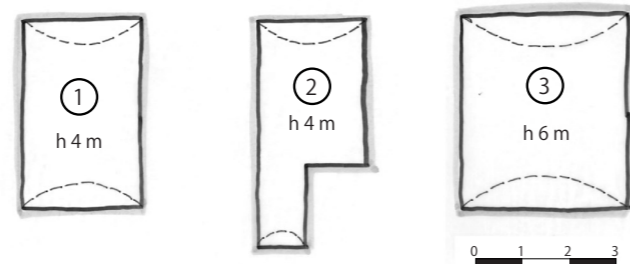
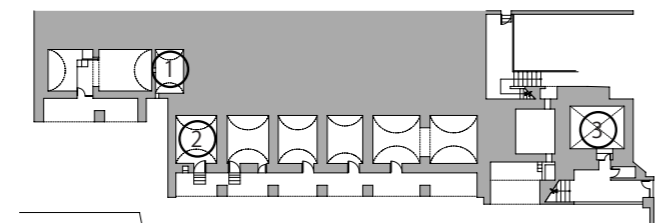


Le altre due cisterne sotto a casa Pandolfi.

di tutte le cisterne esistenti solo una è risultata ancora utilizzata anche se in modo improprio rispetto al suo uso originale in quanto l'acqua funge solo da cella frigorifera.

Cisterne case Pandolfi: il complesso edilizio di casa Pandolfi è caratterizzato dall'associazione di più corpi di fabbrica che si sono aggiunti nel corso del tempo: un primo nucleo è costituito dalla torre medioevale (fam. Anastasio) a cui poi si è aggiunto il principale edificio residenziale e i suoi ulteriori ampliamenti. Ciò è esplicitato anche dal numero di cisterne; una per la torre e due per la parte residenziale. Tutte e tre sono ancora funzionanti anche se non utilizzate. La torre ha una cisterna di dimensioni considerevoli (80 mc) ed in pratica occupa tutta la parte basamentale di detto edificio. In questo caso non si rilevano pozzi per attingere acqua dai piani alti anche se la cosa doveva essere più che probabile. Si rileva invece un accesso da quota poco superiore alla cisterna stessa, tramite una scala da cui si attingeva l'acqua per poi riversarla in una piccola vasca esterna probabilmente per uso agricolo. Come per tutte le altre cisterne la superficie delle pareti interne alla cisterna è intonacata in modo tale da impermeabilizzarla, la parte superiore non lambita dall'acqua e la copertura a volta invece sono rimaste con muratura a vista.

Altre due cisterne si possono ritrovare nella parte orientale del corpo di fabbrica principale e al centro dell'edificio più occidentale di tutto il complesso. La prima è interamente ipogea e raggiunge la quota di -4 m rispetto al piano di calpestio. L'accesso avviene tramite un'apertura molto stretta e lunga che non ne permette il rilievo. Risulta comunque anche questa intonacata e piena d'acqua. L'ultima cisterna, posta nella parte più occidentale dell'edificio, è uno dei pochi esempi in cui la quota è la stessa del



La cisterna ancora funzionante nel basamento della torre.



La cisterna ancora funzionante nel basamento della torre e il relativo foro per attingere acqua dai piani superiori.



Cisterna non più funzionante sotto all'abitazione dell'arch. De Martino.



Cisterna dell'edificio adiacente ormai resa abitabile.

piano di calpestio del piano terra. La cosa può trovare spiegazione nel fatto che sia stata realizzata in un secondo tempo, a edificio già costruito, senza quindi correre il rischio di scavare a quote inferiori a quelle delle fondazioni.

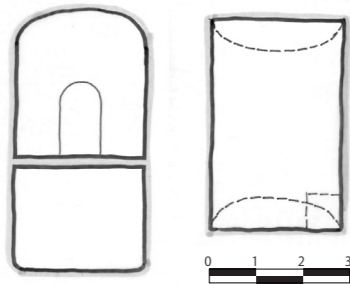
Cisterna Casa Mauro: rappresenta uno degli esempi più complessi tra quelle rilevate in quanto le modalità con cui attingere l'acqua dalla cisterna sono molteplici, probabilmente per assecondare lo sviluppo dell'edificio su più livelli. Una prima modalità è attraverso un pozzo localizzato al primo piano dell'abitazione, in corrispondenza della terrazza. Il piano inferiore, dove si trova una vasca che sembrerebbe essere un lavatoio, ha anch'esso accesso diretto alla cisterna per mezzo di una scaletta che consente di raggiungere la quota più elevata della cisterna e prelevare l'acqua. L'approvvigionamento ovviamente avveniva attraverso un pluviale realizzato con canoni in terracotta che si può ancora scorgere e convogliava le acque meteoriche raccolte dalla copertura e, forse, anche dalla grande terrazza che contraddistingue l'edificio.

In tutti gli altri casi le cisterne rilevate o di cui si ha avuto notizia o sono state integralmente demolite per riorganizzare lo spazio interno o sono rimaste semplicemente dimenticate, magari interrompendo il loro approvvigionamento idrico per vari motivi. Considerata la qualità di questi manufatti, il più delle volte il loro stato di conservazione è ancora buono.

In conclusione la cisterna risulta essere un elemento ormai dimenticato e sottovalutato in quanto con modesti interventi di manutenzione e ripristino delle canalizzazioni potrebbero essere ancora utilizzate per gli scopi più vari: certamente non quello potabile che una volta veniva garantito tenendo delle anguille per la purificazione dell'acqua, ma certamente da quello più tradizionale legato all'irrigazione o a anche l'alimentazione dei servizi igienici, a quello più avanzato legato al raffrescamento degli edifici per mezzo di tecnologie avanzate. Se poi si considera la cosa a scala più ampia, un numero consistente di cisterne potrebbe anche fornire un modesto contributo nel caso di precipitazioni abbondanti; l'insieme delle cisterne lavorerebbe come un bacino di espansione limitando i picchi di deflusso delle acque piovane. Considerato che il volume medio per cisterna, calcolato sulla base di solo 6 esempi, si aggira sui 47 mc, moltiplicando tale valore per il numero delle abitazioni si arriverebbe a qualche migliaio di mc. In conclusione ci si augura che tale patrimonio culturale venga riconsiderato, anche alla luce della sua grande sostenibilità dal punto di vista ambientale.



Il sistema di prelievo acqua e spazio sotto al quale si trova la cisterna (proprietà Avv. Bonocore)



Rilievo di massima della cisterna (proprietà Avv. Bonocore)



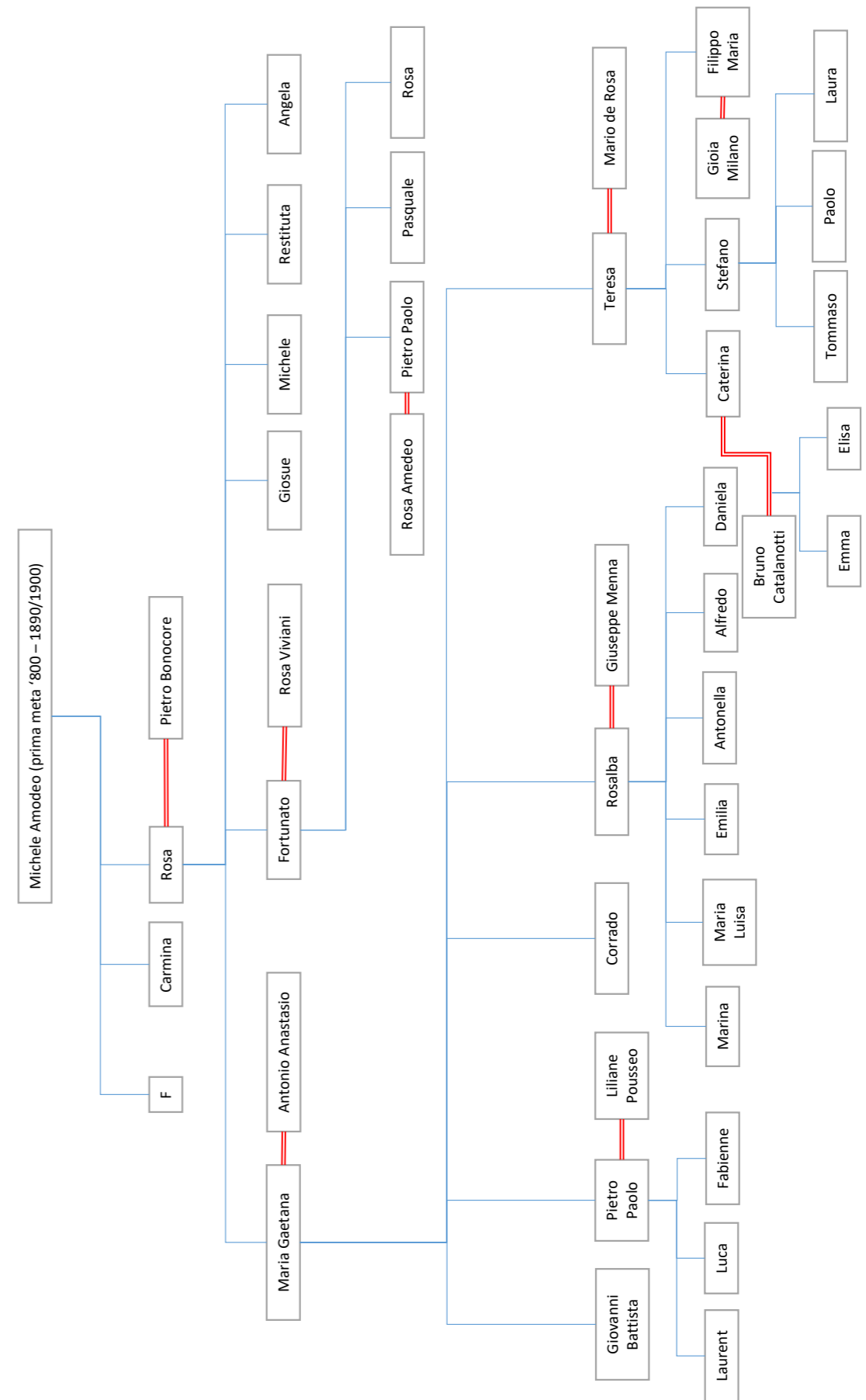
Una delle cisterne presso il borgo lungo via dei Cacciatori, dalla forma molto irregolare si può desumere che la cisterna sia stata scavata nella roccia.



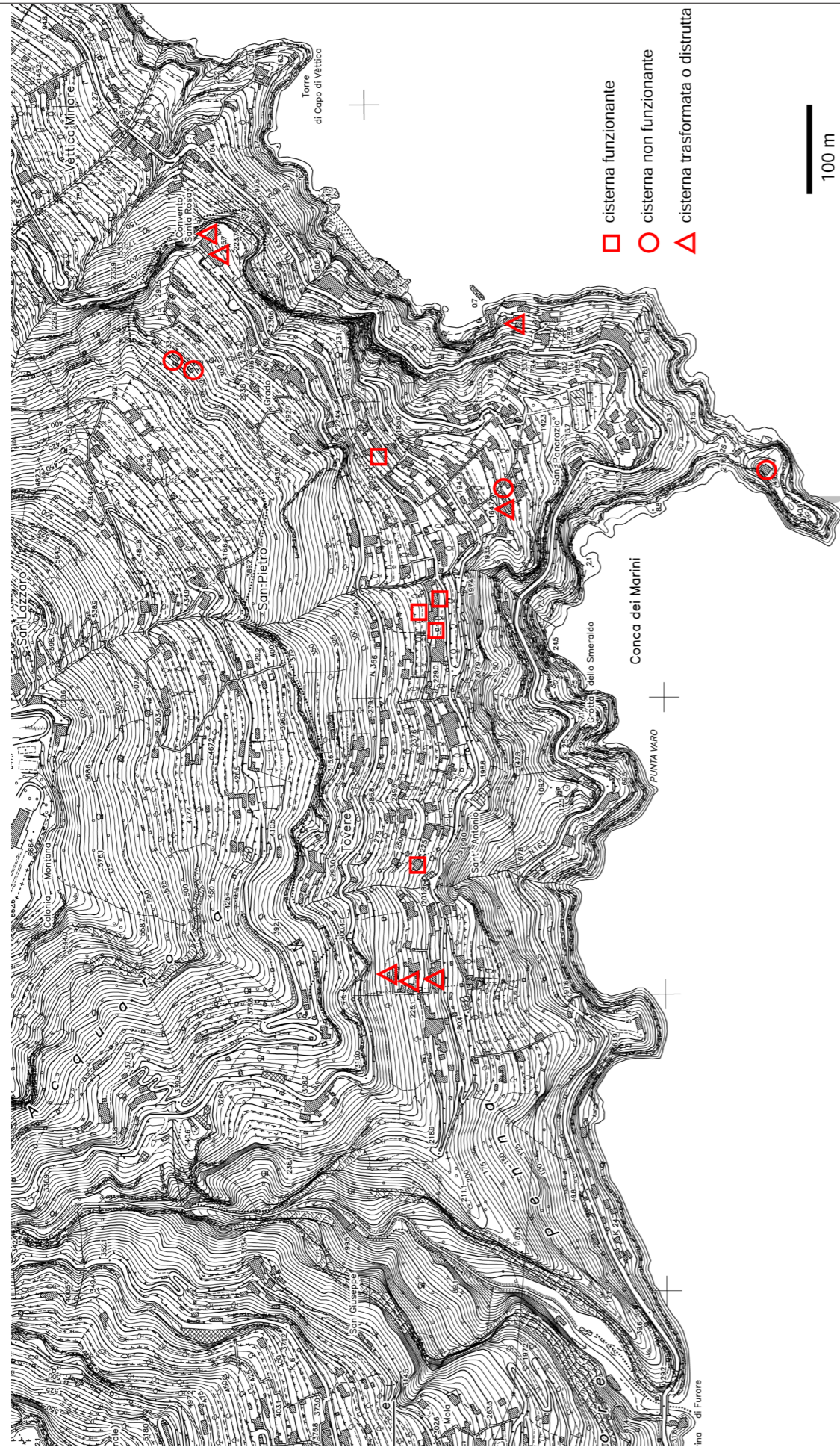
Dettagli del sistema di raccolta acqua piovana dal tetto tramite una sorta di imbuto e relativo pluviale in canoni di terra cotta che rifornivano la cisterna (borgo lungo via dei Cacciatori).

Cisterne inventariate nel corso dei rilievi

1. Monastero S. Rosa: 2 cisterne ora trasformate
2. Palazzo Amodeo: una cisterna ora trasformata
3. Casa eredi Amodeo: 1 cisterna trasformata
4. Casa Bottiglieri: 1 cisterna integralmente trasformata
5. Casa Mauro: 1 cisterna funzionante (capacità 12 mc)
6. Casa arch. De Martino: 1 cisterna esistente e 1 parzialmente trasformata
7. Torre Capo di Conca: 1 cisterna esistente (capacità 13 mc)
8. Edificio loc. Marina: 1 cisterna integralmente trasformata
9. Torre fam. Anastasio: funzionante (capacità 80 mc)
10. Casa Pandolfi: 2 cisterne funzionanti (capacità 43+84 mc)
11. Edificio avv. Bonocore: 1 cisterna funzionante (capacità 50 mc)
12. Edifici lungo via dei Cacciatori: 2 cisterne esistenti



elaborato da Matteo Dario Paolucci a seguito intervista a Stefano de Rosa



付録

2017年8月の現地調査では、以前の調査成果を補足するための実測を行った。
本項は、その成果である。



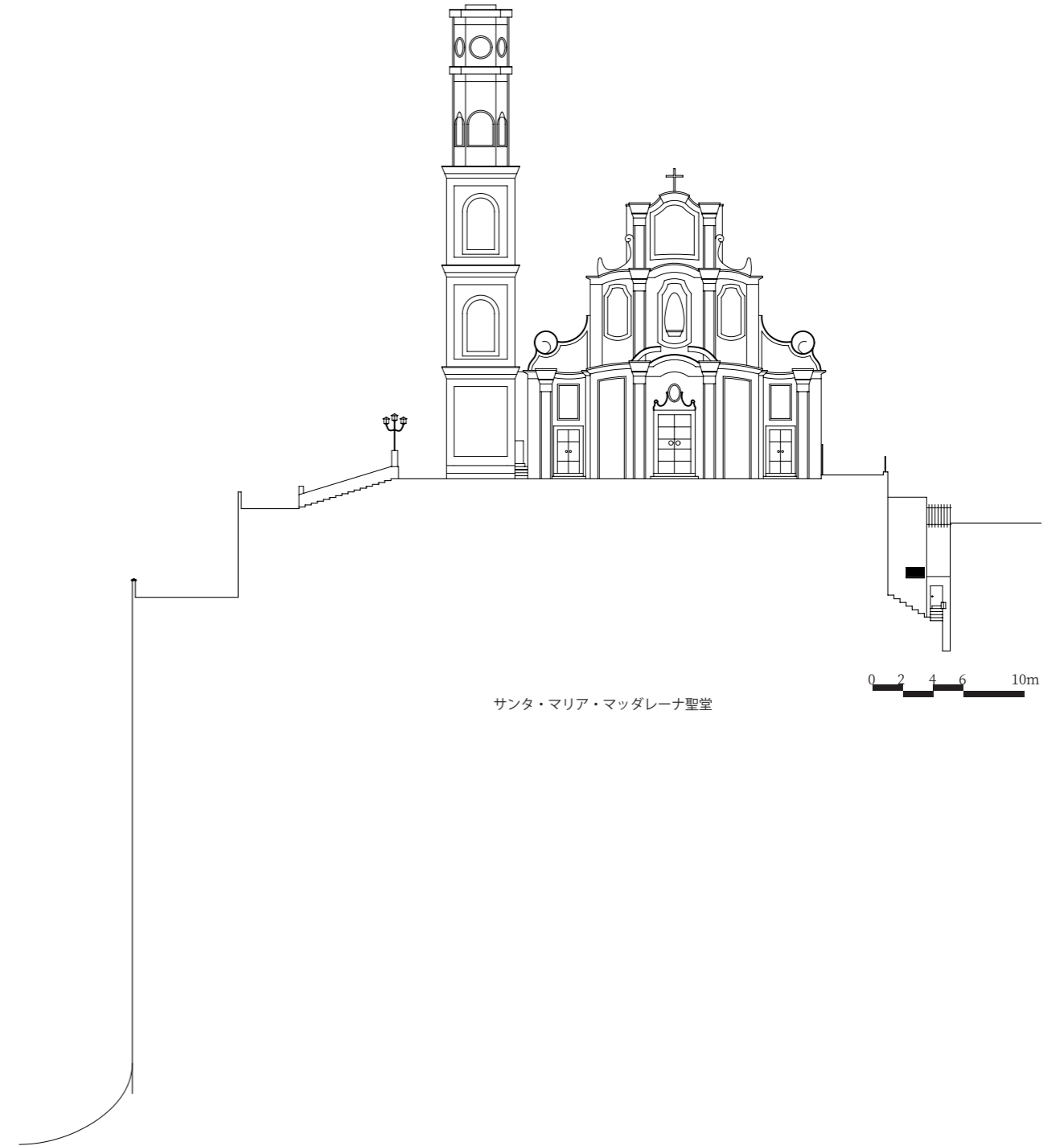
アマルフィ側からみたアトラーニの町並み

アトラーニ

アトラーニ Atrani (人口919人；面積0.2km²)は、アマルフィ市街のあるムリーニ渓谷 Valle del Mulini のすぐ東側、左右に切り立った山の迫る狭隘なドラゴネ渓谷 Valle del Dragone に位置する。アマルフィ東斜面の迷宮のような街路を昇り抜けたかと思うと、すぐにアトラーニの似たような市街に入っていくので、アトラーニはアマルフィに属する一地区ととらえられがちである。しかしアトラーニは独自の町議会と町長を持つアマルフィとは別個の「町」であり(市域面積0.2km²は南イタリア最小)、その歴史はアマルフィ海洋共和国時代まで遡ることができる。

アトラーニの名が文献上で最初に言及されるのは6世紀末のことだが、それ以前からゲルマン民族の攻撃を避けたローマ系の住民が住み着いていたと考えられる。10-11世紀にかけてアマルフィ共和国が台頭するにつれてアトラーニも発展し、共和国の中心都市であるアマルフィとともに、首長の任命・解任権や司教の選定権を握った。この時代に創建を遡れるのが、ウンベルト1世広場に面するサン・サルバトーレ・デ・ビレクト聖堂 (San Salvatore de' Birecto) である。公爵領が廃されるとアトラーニはその政治的重要性を失い、小さな漁村として近代を迎えることとなった。その後も長らくホテルなどの観光産業とは無縁であったが、近年ではアマルフィに続いてリゾート地としての性格を強めている。

アトラーニ最大のモニュメントは、サン・サルバトーレ聖堂よりはむしろ東側の丘の上にそびえ立つ18世紀のバロック建築サンタ・マリア・マッダレーナ聖堂 Collegiata Santa Maria Maddalena であろう。鮮やかなマジオリカ・タイルで覆われたドームは、海から見たアトラーニのピクチャレスクな眺望と切っても切り離せない。一方、細く曲がりくねった街路や暗いトンネルを抜けた途端、忽然と眼前にひらけるウンベルト1世広場 Piazza Umberto I、通称「ピアツェッタ」は、内からしか見えないアトラーニのもうひとつの見所といえる。広場を囲う建物のうちの一つはアンジュー家支配時代の役所であったとされ、かつては税関を備えていたとされる海に向かって開く2つの門も中世の趣を残す。が、19世紀にこれら別々の建物を統合することで広場のファサードが整えられ、屋上を利用して道路が通され、今日見られる姿となった。かつてより商業活動の中心で、食料品店・タベルナやボッテータが軒を連ねていたが、10-15年前からパールやレストランが開業し始め、現在では広場に所狭しとテラス席が設けられている。





東側斜面から見た西側斜面

マイオーリ

V字谷の平地が広いマイオーリだが、西側斜面の突端に古い住宅核があり、階段状の街路が連続している。庶民的な住宅が集まるエリアで、家並みの隙間から東側の斜面地や低地の街並み、海が所々で見える。そんな住宅密集地の一面にある、袋小路を囲む庶民住宅の2軒を実測調査した。

1軒目の住宅は交差ヴォールトの架かった部屋が一部あるだけのコンパクトな住宅である。1階はキッチンと居間として使われており、開口部は少ないが海を見渡せる。また、ロフトを新たに設けて寝室としていた。この家で暮らす91歳の婦人はミノーリ出身で、現在はナポリに住んでいるという。夏の家として7月から9月にかけてこの家を借り、ミノーリの夏をゆったりと満喫するそうだ。

その向かいにある2軒目の住宅は2階建てで、1階に寝室と居間、2階に食堂とテラスがある。部屋の中からの展望は望めないが、広々としたテラスに出ると町並みや海を見ることができる。テラスには食堂からアクセスできるが、階段状の裏道にもテラスへの入り口が作られていた。このように傾斜をうまく利用し、1階とは別の位置に入り口を設けることで上下どちらの階からも住宅へアプローチできるようになっている。また2階の食堂の上に重なる住宅は隣の建物の一部で、テラスと同じ裏道の階段を通してアプローチする。階段は共同のもので、それぞれの建物が地形に対応しながら立体的に構成されていた。

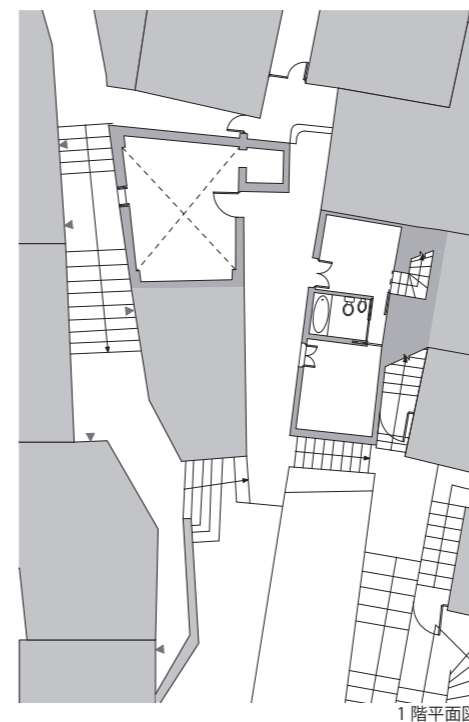


裏道から2軒目のテラスへの入り口



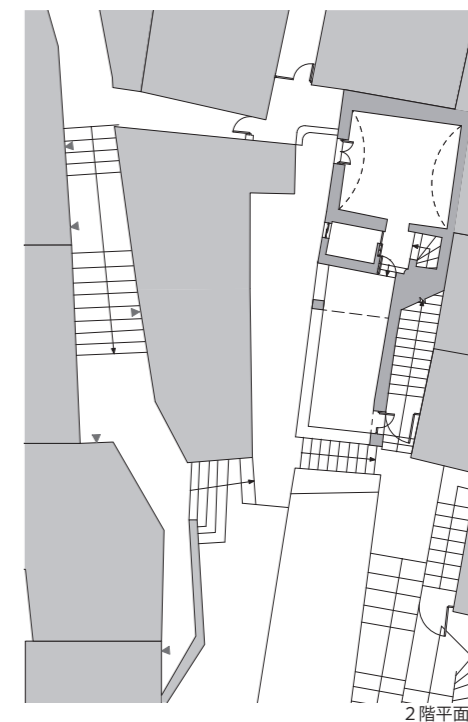
1軒目のロフトが増築された居間

1軒目のファサード

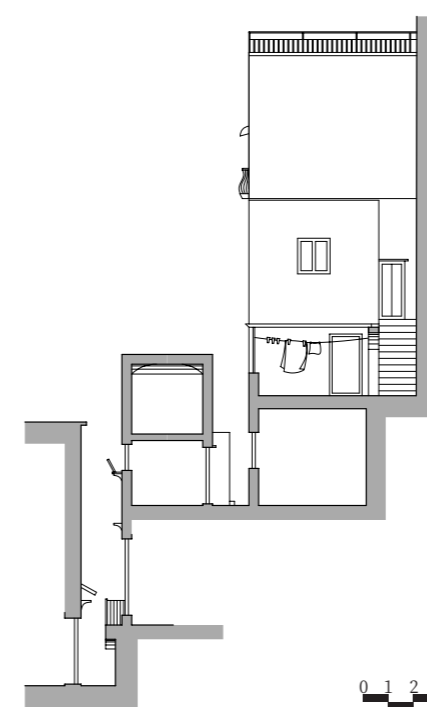


1階平面図

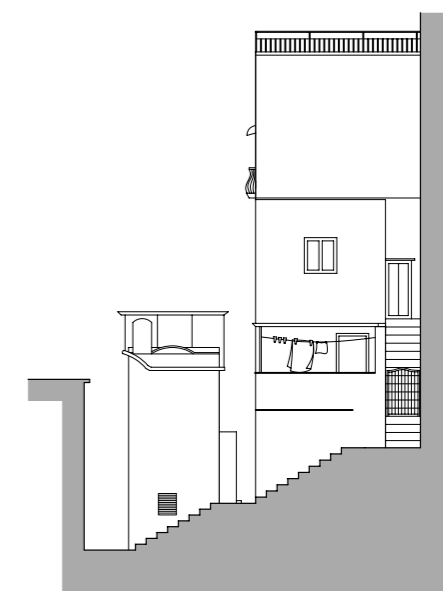
マイオーリ西側斜面地の住宅 平面図



2階平面図



マイオーリ西側斜面地の住宅 断面図



マイオーリ西側斜面地の住宅 立面図



ポジターノ

船でポジターノを訪れると、崖にへばりつくように建てられた家々の白、ピンク、黄色の壁が織りなすピクチャレスな景観に加え、陽光に輝く黄色や緑色のマヨリカ焼のドームを戴く教会堂が目飛び込んでくる。サンタ・マリア・アッスンタ・エ・サン・ヴィト聖堂である。現存する建築は後期バロック様式のものだが、もともとは中世のベネディクト会大修道院教会堂であった。この修道院こそが、現在のポジターノの直接的な起源である。

修道院は、10世紀にイスラーム教徒の攻撃に晒され、パエストゥム平原から逃れてきた修道士たちが創設したと考えられる。文献上最古の言及は994年で、この時点で Seletto あるいは Selitto という名の院長の下、すでに修道院が存在していたらしい。1071年の文献には、「Sergio 公爵がポジターノの聖マリア修道院長 Mansone に、公国内の海の自由な航行を許可」と記されていることから、修道院が漁船を所有し、アマルフィ海岸沖で漁業に従事していたことがわかる。1159年には新聖堂の聖別が行われており、この時期、修道院は最盛期を迎える。この中世の前身建造物に由来すると思われるのが、現在は鐘塔入口上に埋め込まれた12世紀の浮き彫り彫刻や、12世紀から13世紀初頭制作のビザンティン様式の聖母子イコンなどである。

修道院の衰退は15世紀に始まる。理由は不明だが、修道院長が修道士たちをひきつけてこの地を離れてしまったのである。以後修道院は、アマルフィ司教などを院長代理として掲げることで名目上は存続したが、衰退は避けられなかった。18世紀末に修道院が廃され、その聖堂が地元民のための教区教会堂となってようやく復興が始まり、今日みられる新聖堂が建設され、1783年に献堂された。

Lia di Giacomo によれば、教会堂の前身はカンパニアの中世教会堂の類型に沿ったもので、三廊バシリカ式平面を持ち、再利用された円柱を用い、大理石やモザイクで装飾されていたと考えられる。当時の遺構としてはクリプタが残っており、教会堂本体の聖別が1159年であることや、サレルノなど他の教会堂クリプタとの比較から、建造は12世紀前半と考えられる。

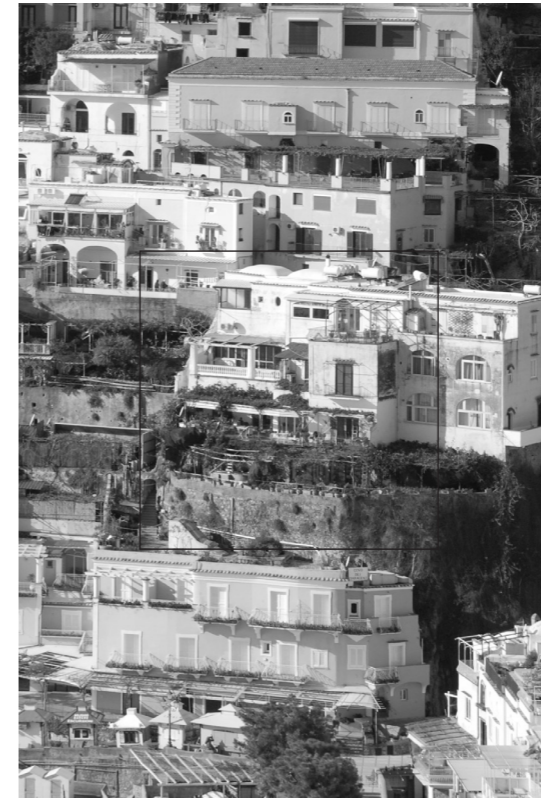
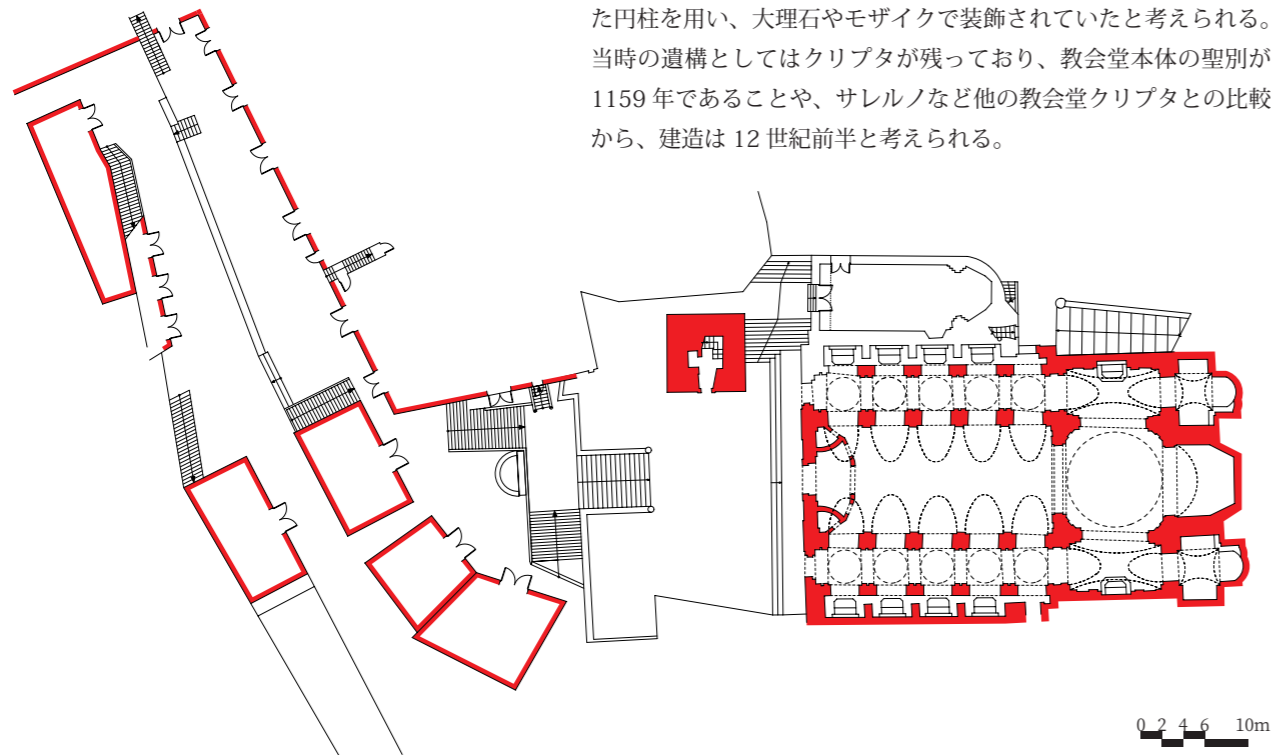


図 5-22 P 邸の外観 (黒い線で囲んだ部分)

ポジターノ

トラーラ・ジェノイノ通り P 邸はもともと今の家よりもさらに上の斜面地に住んでおり、20年前にこの家を買って引っ越してきた頃、ボロボロだった。

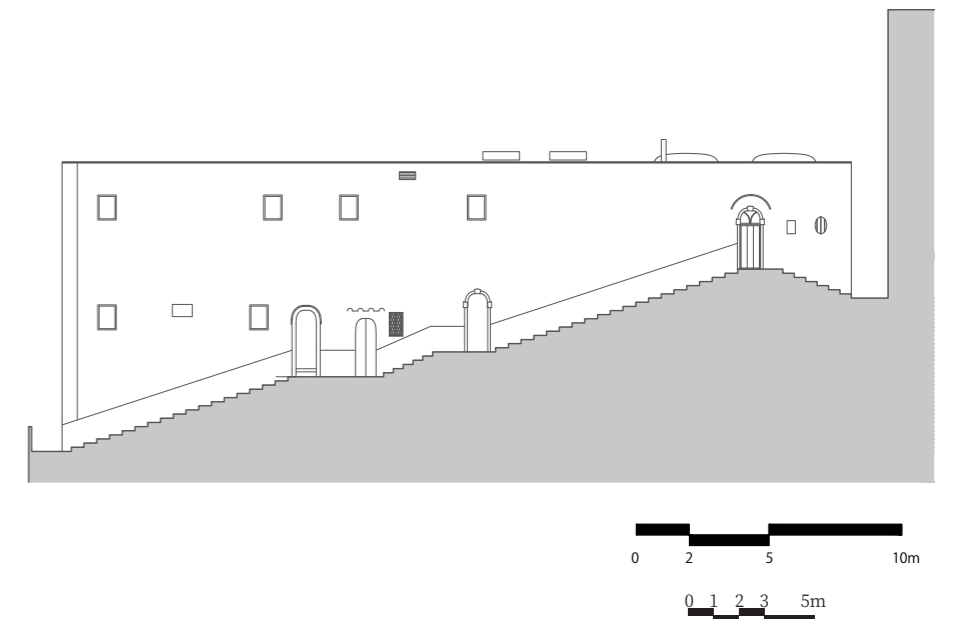
家族は母、娘夫婦、孫の二世帯で、玄関を入ってすぐ階段を下りた所にある開放的なリビングルームにいつも家族が集まる。

テラスからはポジターノの海を一面に見渡すことができ、心地良い風が室内に吹き抜ける。テラス部分ももともと自然の庭だったものを、床材を張り、人工的なテラスにつくり変えている。

ぶどうの段々畑のようにテラスは広がり、屋根は可動式でプールやぶどうの柵があり、テラスにはゆったりとした時間が流れる。下の階にも上の階にも別の家族が住み、どの家族も同じ道路から入口をとる。13、14世紀にポジターノの市の発展が見られた時期つくれた住宅と考えられる。



図 5-21 リビングルームのヴォールト



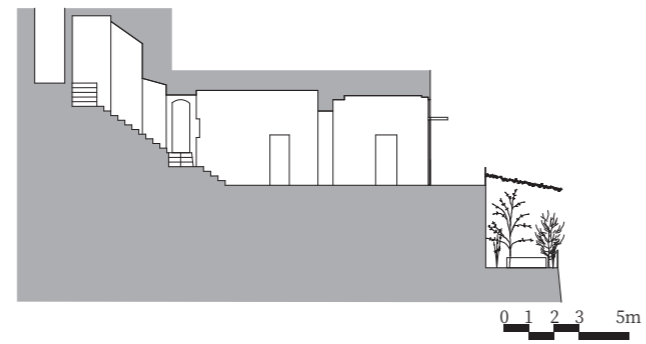
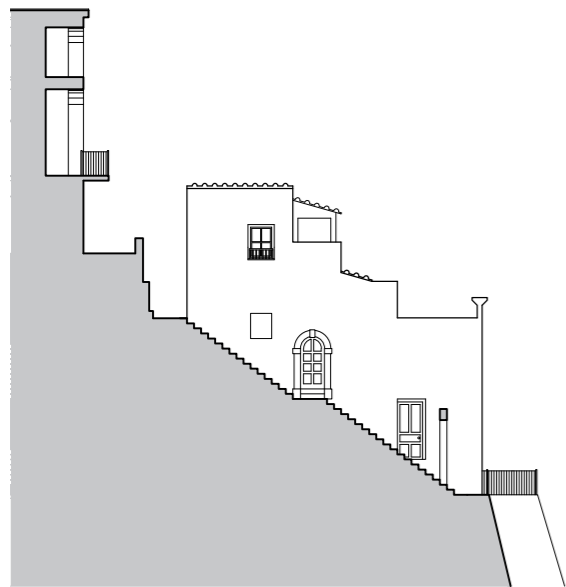
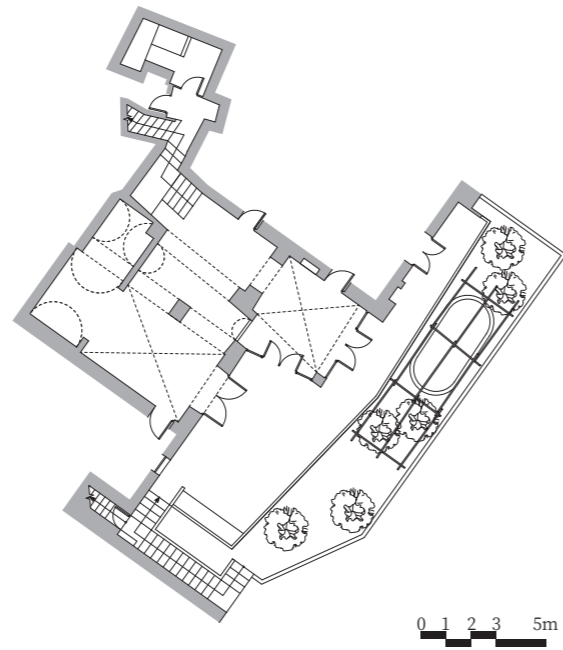
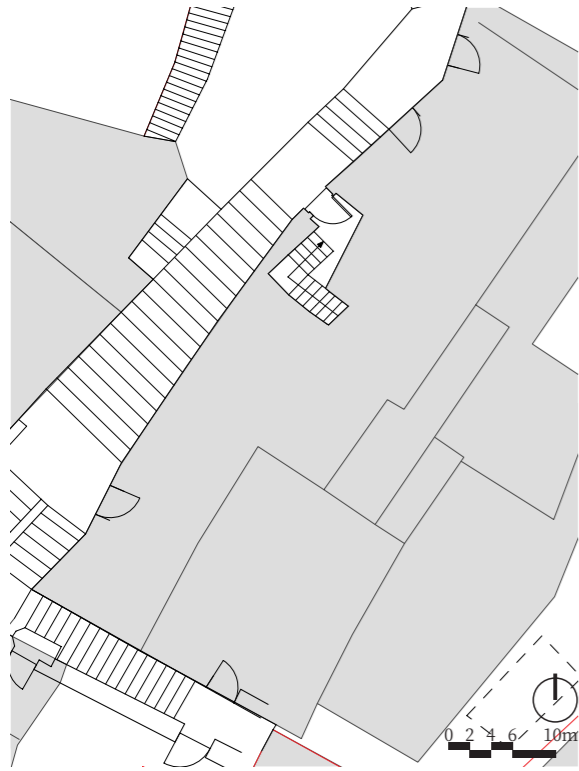
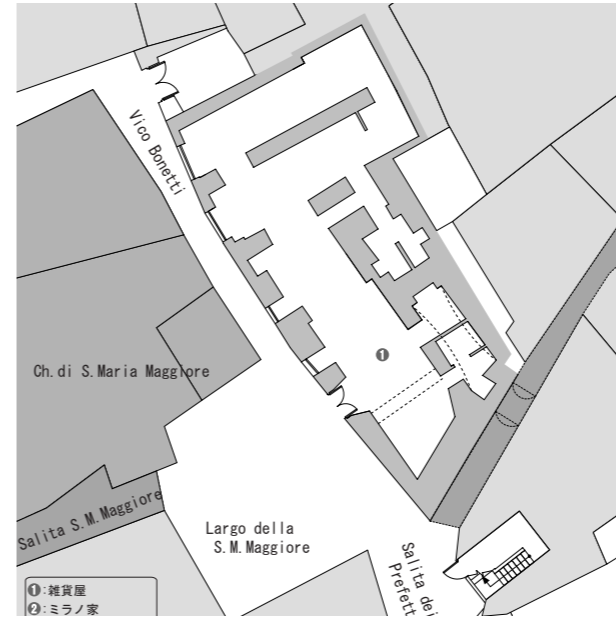


図 5-20 トラーラ・ジェノイノ通りP邸 断面図

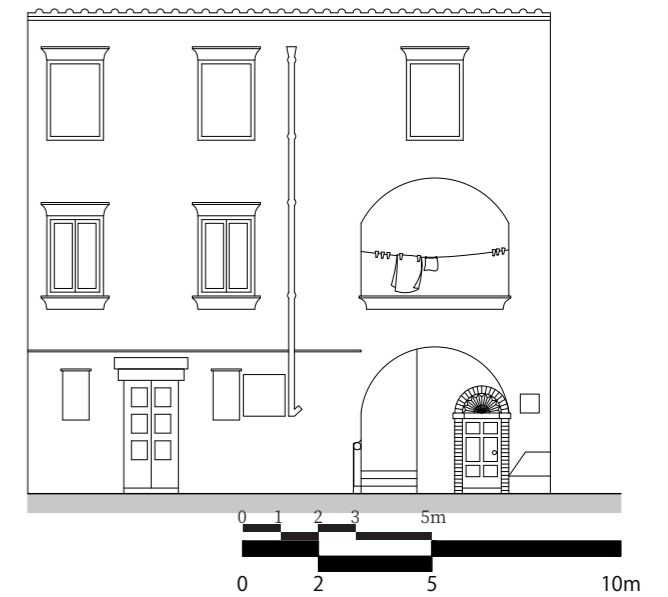
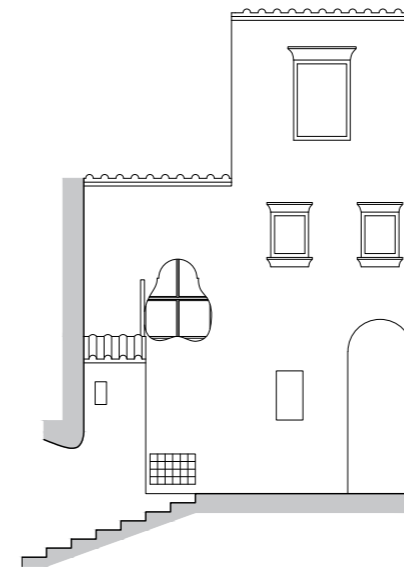


アマルフィ

サンタ・マリア・マッジョーレ広場 (Largo della S.Maggiore) に面した建物の一層目は、レストランが入っている。二層目以上が住宅として使われている。そしてこれらの住宅へのアプローチは通りから直接とることはなく、トンネルで引き込み脇の階段状の街路からとっている。現在、商業空間はメインストリートに移行しているが、以前この通りにも商業空間があり、住空間との分節機能はこの時から存在し現在も受け継がれている。唯一直接アプローチする住宅があるが、空中庭園を持ちワンクッションおくことで、私的空間を静かな奥へ配している。

二階にミラノ家の住宅がある。別荘として利用し、アマルフィの夏を楽しんでいる。住宅の一部がサンタ・マリア・マッジョーレ教会の二階にかかり、細い街路にトンネルをかけている。また、住宅へのエントランスはサンタ・マリア・マッジョーレ教会の向かいのトンネルから入り、小さなコルティールで引き込み、三世帯共同でそのコルティールを使用している。住宅がトンネルの上に架かるかたちになるため、部屋から下を通るトンネルを見下げることもできる。台所のアーチを境に、住宅内で壁厚、天井高が異なる。アマルフィの複雑な住宅を象徴するかのようだ。

向かいには、かつて唯一の映画館だった建物があるが、それが建設される(1950年)以前は平屋の建物で、住宅からの眺望は恵まれたものだった。現在も窓からは広場の光景を眺め、近所の人同士のおしゃべりを楽しむことができている。



■参考文献

- ・法政大学デザイン工学部建築学科陣内研究室『中世海洋都市アマルフィの空間構造 - 南イタリアのフィールド研究 -』2002 年
- ・法政大学大学院エコ地域デザイン研究所陣内研究室『南イタリア海洋都市の形成と再生 -Gallipoli/Monopoli-』2008 年
- ・法政大学デザイン工学部建築学科陣内研究室『アマルフィ海岸 - 海洋都市の形成と景観の変化に関するフィールド研究』2012 年
- ・法政大学デザイン工学部建築学科陣内研究室『アマルフィ海岸の地域構造 - 海と山を結ぶテリトリー -』2015 年

■本報告書の作成・協力者

調査参加・執筆 陣内 秀信 Hidenobu Jinnai 法政大学デザイン工学部教授・法政大学エコ地域デザイン研究センター長
稲益 祐太 Yuta Inamasu 明海大学非常勤講師・法政大学エコ地域デザイン研究センター客員研究員
M. D. パオルッチ Matteo Dario Paolucci 法政大学エコ地域デザイン研究センター客員研究員
鈴木 あゆみ Ayumi Suzuki 法政大学大学院デザイン工学研究科（修士課程）
上堀 祐真 Yuma Kamihori 法政大学デザイン工学部

図版作成 中島 夢香 Yumeka Nakajima 法政大学デザイン工学部
中村 優花 Yuka Nakamura 法政大学デザイン工学部
福地 昂弥 Takaya Fukuchi 法政大学デザイン工学部
吉田 純子 Junko Yoshida 法政大学デザイン工学部

■あとがき

陣内研究室に入って昨年に引き続き 2 回目のアマルフィ海岸調査である。昨年の失敗や経験を活かしながら、より良い調査となるよう、不安と期待でいっぱいになりながらイタリアへ向かった。アマルフィからバスに揺られ、コンカ・デイ・マリーニに到着すると、まず大きな 5 つ星ホテルが見える。中に入ると修道院の昔ながらの要素を残しながらも、現代風なホテルにリノベーションされている様子がとても良く分かった。眺めも立地も良く、プールから見える一面に広がる海がとても印象的だった。街中を歩き回ると、特に中心となる密集した地域はなく、建物が点在している。これがコンカの最大の特徴である。他にも、上から下まで長く続く急な階段が至る所にあり、毎日足腰が痛くなりながら沢山歩いたのも良い思い出である。今回の調査は特定の調査場所は決まっていなかったのにも関わらず、街中の人々が暖かく迎えて下さり、多くの実測ができた。どの方も私たちの調査に協力的で、美味しいごはんを頂いたり、ボートを出して下さったり、とても貴重な経験ができた。毎回多くのことをご指導下さる陣内先生や稲益さん、学生 2 人という少ない人数ながら、几帳面に実測をしてくれた上堀さんに大変感謝している。そして現地の方々の協力のもと、今回もまた素晴らしい調査を終えることができた。また今年の調査でも多くのことを経験し、修論へと繋げたいと思う。

鈴木 あゆみ

私は陣内研究室に入り、建築の見方が変わった。建築やその土地を過去から未来に渡って観察し、歴史を覗くことでその性質を見抜く。この建築の捉え方を陣内先生のもとで学びたいと考え今回のイタリア調査に同行させてもらった。調査地であるコンカ・デイ・マリーニは急勾配な斜面が続き、その土地を端から端まで歩き身体中痛くなったのはいい思い出。その土地の歴史を知り、建築を観察し、人と交流し、現地の美味しい食べ物を食べることで 1 日歩いていたことも全く苦にならず、むしろ楽しんで調査に取り組むことができた。この調査ではコンカの人々が積極的に協力してくれて、人の暖かさをよく実感することができた。街を歩けば声をかけてきて、家を見せてくれて、おもてなしもしてもらい、我々のような見知らぬ日本人を歓迎してくれた。私は、今回の調査で建築と地形には深い関係性が存在し、それぞれの場所に、意味のある建築がある存在していることを学ぶことができた。これは日本の建築にも同様に考えることができ、就職した現在でも活かせる知識であると確信している。このような貴重な経験をさせていただいた陣内教授には大変感謝している。

上堀 祐真

アマルフィ海岸のコンカ・ディ・マリーニ —離散型集落からなるテリトリーオの空間構造—
Costa di Amalfi- Conca dei Marini -Insediamenti diffusi nell'organizzazione spaziale del territorio-

陣内秀信・稲益祐太+法政大学陣内研究室 著

発行 2019年7月1日 第2版

2018年2月28日 初版

発行所 法政大学エコ地域デザイン研究センター

Edition July 1, 2019 (2nd. edition), February 28, 2018 (1st. edition)

Publisher Laboratory of Regional Design with Ecology, Hosei University

ISBN : 978-4-9907970-7-2